



Title	日本語講座年報 2023-2024（冊子）
Author(s)	
Citation	日本語講座年報. 2025, 2023-2024
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102661
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語講座年報

2023-2024 大阪大学 日本語講座



Annual Report 2023-2024
Japanese Language Major
School of Foreign Studies
Osaka University





大阪大学外国語学部外国語学科日本語専攻



ご挨拶

今年も『日本語講座年報』を発行する時期となりました。この年報は、大阪大学外国語学部外国語学科日本語専攻の学部生や、大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻および人文学研究科日本学専攻の大学院生、またそれぞれの卒業生や修了生、教員等の活動実践を報告することを目的に、毎年一回発行しています。日本語専攻は外国語学部の25専攻の中の一つで、一般の学生と留学生が、日本語や日本文化、日本語教育に関してともに学ぶことにより、日常的に他者からの視点を意識せざるを得ないところが他の専攻とは異なります。学生たちは、そのような環境の中で日本語や日本文化を客観的に見ることを学び、在学中に国内だけでなく海外も含めたさまざまな場所で日本語を学ぶ人たちと関わるなど、積極的に大学の外へ、日本の外へと出かけていきます。

『日本語講座年報』は、大阪大学外国語学部の前身とも言える大阪外国語大学外国語学部日本語専攻の時代に刊行され、今年で22冊目を数えるまでになりました。日本語や日本文化にまつわる多様な経験とそこで得られた気づきや発見などについて、エッセイや報告書の形で執筆者の思いが綴られています。ご意見、ご感想などありましたら、ぜひお寄せください。

大阪大学外国語学部外国語学科日本語専攻 専攻語代表 山泉 実



目次【今年の一年】 2023-2024

1	 今年の世界地図	1
2	 海外からの便り ドイツ・ヤポニクムにおける日本語集中講座	4 細野 怜花（M）
3	 日本で働く先輩たち 公教育における母語話者教員としての役割と使命	8 田 慧听（M）
4	 行ってきました！ 2024年度見学旅行報告	12 カトウン・ハリマ（M在）
5	 はじめまして 赴任一年目をふりかえって	16 渡部 直也（教）
6	 もう読んだ？ 『ウクライナ・ロシアの源流～スラヴ語の世界～』	18 渡部 直也（教）

U：大阪大学外国語学部外国語学科日本語専攻

M：大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士前期課程／人文学研究科日本学専攻博士前期課程

D：大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程／人文学研究科日本学専攻博士後期課程

R：大学院研究生

在：在学中

教：教員

【日本語教育実習・授業報告】

日本学生支援機構大阪日本語教育センターでの日本語教育実習報告	寒川ちなつ(U在) 21 白崎 未桜(U在)
ドイツ・デュッセルドルフ大学での日本語教育実習報告	梅下 華琳(U在) 26
タイ・チュラーロンコーン大学での日本語教育実習報告	池内 優香(M在) 29
タイ・チェンマイ大学での日本語教育インターンシップ	田中 倫(M在) 33

2024年度日本語専攻必修科目「日本語実習」「日本語演習」授業報告

日本語実習・日本語演習 2024年度の概要	永原 順子(教) 38
2024年度(春夏学期) 日本語1 実践報告	六城 雅章 40
2024年度(通年) 日本語2 実践報告	サンジャヤ ソンダ(D) 42
2024年度(通年) 日本語4(講読)実践報告	宮崎 玲子(M) 45
2024年度(春夏学期) 日本語5 実践報告	六城 雅章 49
2024年度(秋冬学期) 日本語5(文法)実践報告	荒島 和子(M) 52
2024年度(春夏学期) 日本語15 実践報告	谷口(井手) 恭子(M) 54
2024年度(秋冬学期) 日本語15 実践報告	金谷由美子(M) 57
2024年度(春夏学期) 日本語Ⅰa 実践報告	サンジャヤ ソンダ(D) 59
2024年度(春夏学期) 日本語Ⅱa 実践報告	金谷由美子(M) 61

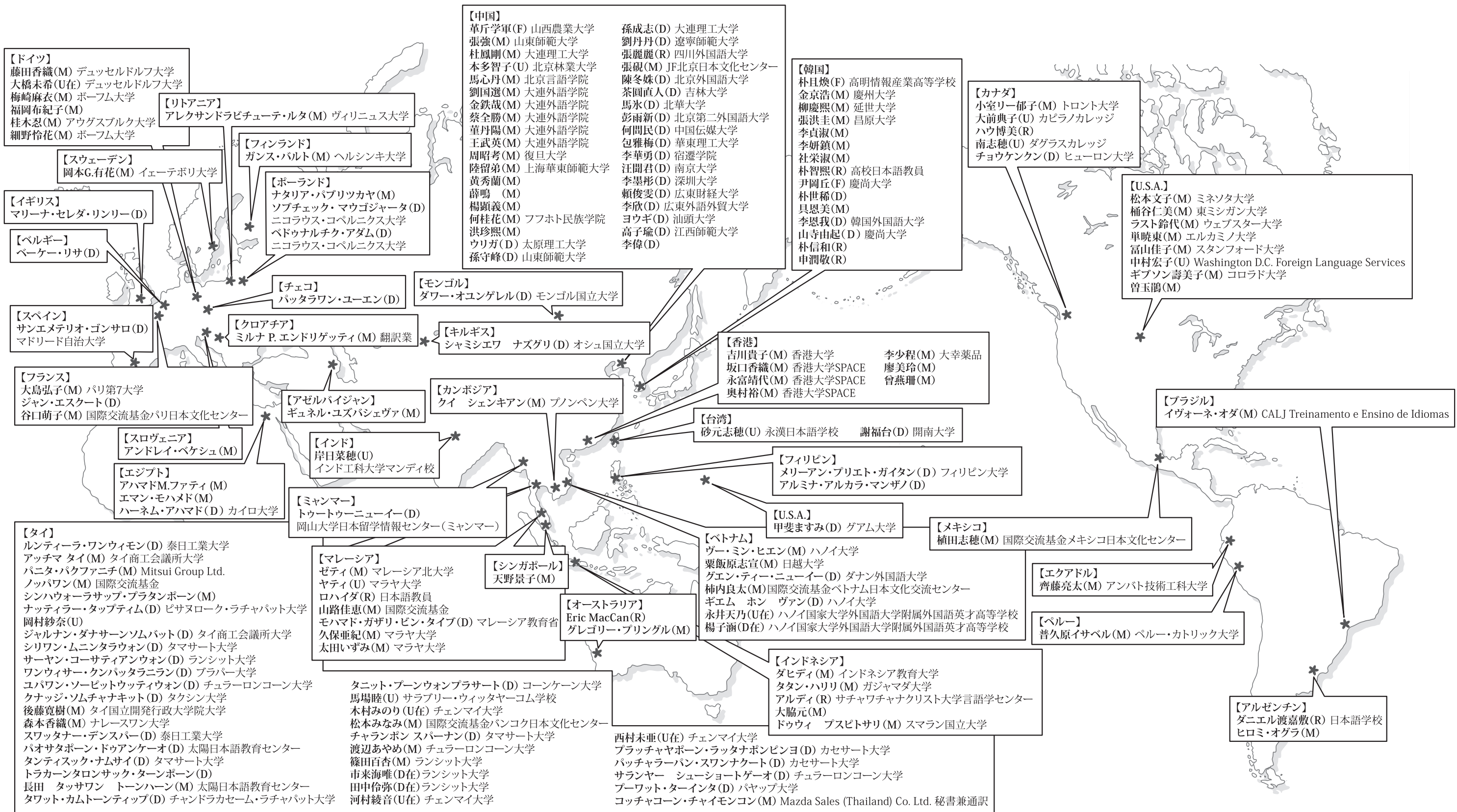
【海外交流】

第6回 アンコールワット国際日本語教育セミナー参加報告書	下本有美香(M在) 63
------------------------------	--------------

卒業論文題目リスト	67
人物往来	68
投稿規程	69



2025年3月現在



(U)(M)(D)(R)(F)は、それぞれ、学部、博士前期課程、博士後期課程、大学院研究生・外国人研究員という意味で、大阪大学（旧大阪外国語大学を含む）の所属を表しています。本学を卒業後、他大学に留学中の方もいますし、他大学に進学した後、現在の仕事についておられる方もいらっしゃいます。「在」がついている方は、2025年3月現在、大阪大学に在学中の皆さんです。

残念ながら、卒業生全員の所在を把握することはできませんでした。特に、学部を卒業して海外にいらっしゃる方、研究生を終えて海外にいらっしゃる方の所在がわかりません。情報が古い方もいらっしゃるでしょう。ご存じの方は、是非Eメールで j.nagahara.hmt@osaka-u.ac.jp までご一報ください。



2022年度に博士前期課程を修了した細野怜花と申します。私は現在、ドイツにあるボーフム・ルール大学外国語教育研究所(LSI)日本語学科(ヤポニクム)にて客員講師を務めています。

LSIとは、1973年に成人を対象として開校された州立の外国語教育機関で、2007年からルール大学の附属機関となりました。日本語以外にも、アラビア語、中国語、韓国語、ロシア語、外国語としてのドイツ語(DaF)のコースを定期的に提供しており、さらにペルシャ語、タガログ語、英語のコースも不定期で提供しています。大学の附属機関ではありますが、学習者は大学生に限らず、ビジネスマンや高校生、引退後の世代に至るまで、幅広い年齢層の多様な背景を持つ学習者が受講しています。

ヤポニクムのコース概要

ヤポニクムの特筆すべき大きな特徴の一つとしては、「集中講座」の提供が挙げられます。集中講座とは、月曜日から金曜日まで全日の授業を2週間継続して提供する講座形態で、コースの参加者の多くは、敷地内に隣接するゲストハウスに泊まり込み、まさに「日本語漬け」の2週間を過ごします。定期的に関講されるコースは主に、初級レベルの「日本語1・2」、中級レベルの「日本語3・4」の4つで、その他にも、上級レベルの『オーバーコース(Oberkurs)』、中高生向けの『シューラーコース(Schülerkurs)』、日本からドイツ語学習者を招いて日独学習を合同で行う『タンデムコース(Tandemkurs)』など、多種多様なコースが提供されています。基本的には教授法はドイツ語を媒介語として用いた間接法を採用していますが、目的やレベルに応じて直接法を使うこともあります。授業形態は、以前は対面授業のみを提供していましたが、コロナ禍をきっかけに、教室に遠隔授業システムが設置され、現在は対面形式の授業にオンラインでの受講者も参加するハイブリッド形式の授業も行っています。

また、コロナ禍以降はオンライン授業にも力を入れており、「日本語1-4」授業は、夜間のオンラインコースでも提供されています。夜間コースは週2回・10週間のカリキュラムで、仕事や学業などのために2週間の集中講座に参加することが難しかった学習者に人気のあるコースです。

授業を担当する教師は全部で5人で、私を含む3人が日本語母語話者、他2人がドイツ語母語話者で、全てのコースをチームティーチングで担当しています。



LSIの外観

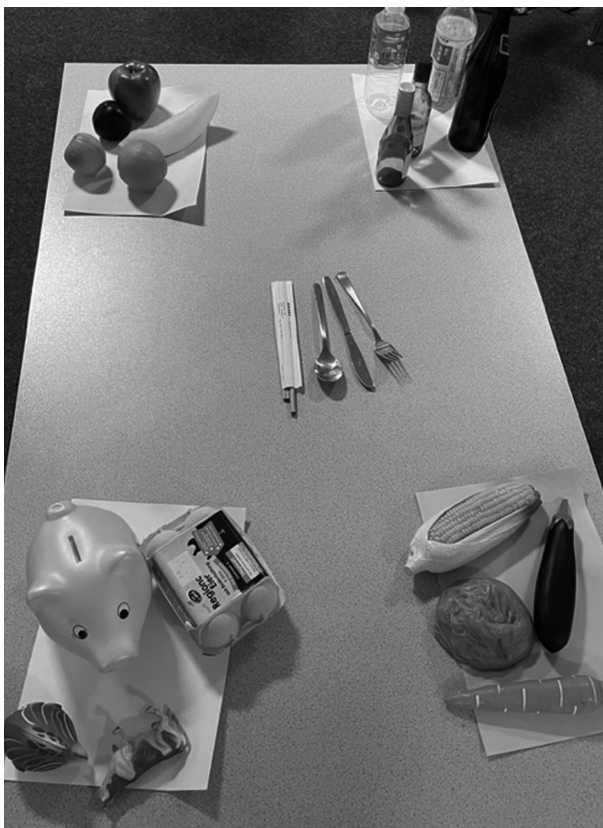
特色ある授業実践

ヤポニクムの集中講座は、月曜日から金曜日の朝8時半から17時まで、2週間みっちりとかリキュラムが組まれています。ある種の『日本語合宿』のようなスタイルなので、受講者にコースの最後まで集中力を切らさず、モチベーションを高く保ってもらうために、授業内で様々な工夫がなされています。授業のレベルごとにカリキュラムは異なりますが、本稿では初級レベルの「日本語 1・2」で行われているいくつかの授業実践をご紹介します。

まず、集中力・体力に余裕のある午前中は、ヤポニカムが独自に開発した教科書を用いて、新しい語彙や文型の導入を行います。2週間という限られた時間で、受講者ができるだけ多くの表現を自分のものにできるように、体操やジェスチャー、ダンス、ゲームなどの活動が積極的に取り入れられています。毎日続く長時間の授業の中でも受講者が楽しんで学習できるような雰囲気作りが、私たち教師チーム全体で常に強く意識されています。

午後には、まず全身反応教授法(Total Physical Response, TPR)を用いた活動が行われます。これは、翌日以降に導入する項目を説明せずに聞かせ、意味を推測しながら教室のものを探したり選んだり、パントマイムで見せたりし合う活動です。未知の語彙や表現を聞き、トライ＆エラーを繰り返すことで、新しい外国語を学ぶ際の心理的ハードルを下げる効果も期待されます。

以下の写真は食べ物・飲み物がテーマのTPR活動を行った際の写真です。教師が口頭で「野菜を指してください」「豚肉を指してください」等の指示を出し、受講者は指示を聞いて動きます。段階を踏んで、「ビールを取ってください」「バナナをナイフとフォークで食べてください」など様々なバリエーションの指示を出します。受講者はこの活動内では一貫して発話が求められないため、指示の理解に集中することができるというのも、このTPR活動の利点の一つです。



食べ物・飲み物がテーマのTPR活動

TPR活動の後は、シチュエーション練習と呼ばれる会話練習の活動を行います。レストラン訪問、道案内、買い物など、初級の学習者でも日本に行けばすぐに出会うことになる可能性が高い場面の短い会話を練習する活動です。受講者がお互いに自由に話しかけ、短い会話を何度も繰り返して練習をします。慣れてくるとアドリブを利かせて会話を楽しむ受講者も多く、コミュニケーションですぐに使えるということを目指し、これまでに学んだことのアウトプットの場として活用されています。

そして、漢字学習の時間も設けられています。ヤポニカムでは口頭コミュニケーション能力の養成に力を入れているため、漢字学習はあくまでプラスアルファの項目として扱われています。「日本語 1」で約80字、「日本語 2」で約60字の漢字を学習しますが、授業内では既習の漢字にも常にふりがなをつけています。受講者は基本的に非漢字圏の学習者であるため、イラストの

載った漢字カードを使って記憶の助けにしたり、全員で腕を大きく使い空書きをして漢字の形を体に染み込ませたりと、様々なストラテジーを使って、楽しく漢字を学習できる機会を提供しています。

その後、これまで学んだ知識を体系的に整理するための時間として、文法まとめの時間が設けられています。この授業は主にドイツ語母語話者の教師によってドイツ語で行われ、ドイツ語話者がつまづきやすいポイントなどを改めて確認することができます。特に初級では、日本語とドイツ語の言語としての違いの大きさに衝撃を受ける学習者も珍しくないため、媒介語のドイツ語を使って明示的に日本語の特徴を学べるのが、受講者の大きな助けとなっています。

このように、アクティブな活動の時間とパッシブな理解の時間が代わる代わる効果的に配置されていることで、長い集中講座の中でも気分のメリハリをつけ、最後まで楽しく学習に取り組めるようになっています。

アクティブなハイブリッド授業への挑戦

対面授業をカメラで配信してオンラインでも参加すると聞くと、オンラインの受講者はただ外から対面授業の様子を見学しているだけといった形式の授業を想像される方も多かもしれません。しかし、ヤポニクムのハイブリッド授業では、オンライン受講者も主体的・積極的に授業に参加できる「アクティブなハイブリッド授業」を目指して、日々授業の進め方を工夫しています。以下の写真のような遠隔授業システムを使い、オンライン受講者の顔のみならず、対面受講者や教室の様子までもモニターに写し、オンライン受講者もまるで教室にいるかのような雰囲気を作っています。会話練習などのペアワークの際は、オンライン受講者と対面受講者が一対一で話す機会を設けるために、教室内に複数台のタブレット端末を設置し、対面・オンラインに関わらず、全ての受講者がアクティブに授業に参加できるように心がけています。また、必要に応じて、FigmaやPadletなどのオンラインツールも積極的に活用し、ハイブリッドだからこそできる活動も柔軟に取り入れています。オンラインツールは常に新しいものが開発され続けており、よりよいツールを探したり、新しいツールを使いこなしたりするのは難しいこともありますが、よりよい授業にしていくために、日々アンテナを張って、情報収集に努めています。



教室の遠隔授業システム

おわりに

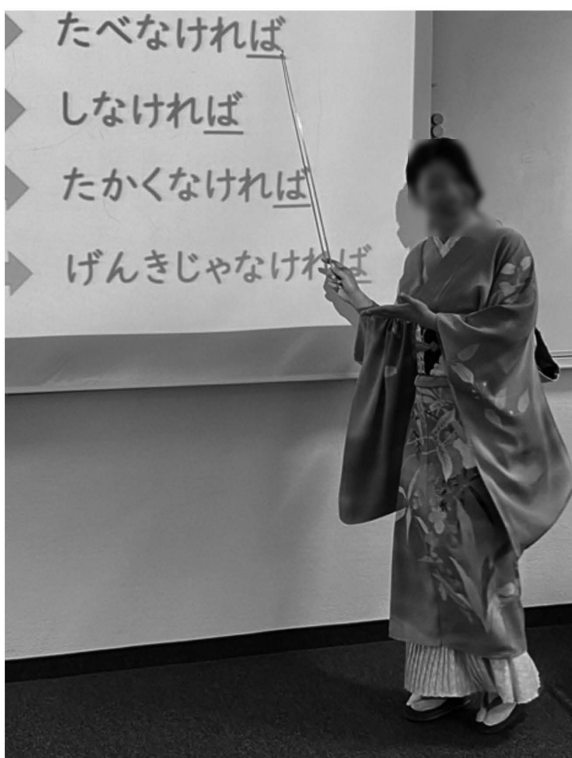
ヤポニクムは、全日コースでは2週間、夜間コースでは10週間という比較的短い期間でコースを終えます。通常の大学のセメスターなどと比べると確かに短いですが、特に全日コースでは毎日朝から晩まで顔を合わせるため、短期間ながらも思い出深い、濃い関係を築くことができます。様々な年齢・ニーズ・背景の受講者が集まるため、授業の進め方などに悩んだり、苦労したりすることも少なくないですが、コースに参加した受講者が、「とても楽しかったから!」と次のコースにも継続して参加してくれたり、友人や家族などを紹介してくれたりすると、「満足してもらえてよかった」「またこれからも頑張ろう」と、達成感ややりがいを感じます。

また、個人的な話ではありますが、時々趣味の着物を着て授業をさせていただけるのも、日々の楽しみの一つです。(ドイツは日本に比べて暑い期間が短いので、一年の4分の3ほどは袷の着物が着られて、日本にいた時より充実した着物生活が送れています。)着物に興味を持ってくれる受講者が多く、習ったばかりの日本語で一生懸命に褒めてくれたり、着物について質問してくれたりして、とても嬉しいです。

そして、1年ほど前から、大学のドイツ語のコースにも参加して、日々ドイツ語の勉強にも励んでいます。学生として言語の授業に参加すると、言語の知識だけでなく、授業のやり方やフィードバックの仕方など、教師として学ぶことも多く、たくさんの刺激をもらうことができます。

日本語教師としても、ドイツに住む外国人としても、まだまだ経験不足で、うまくいかないことやカルチャーショックなどで大変だと思いうことも少なくないですが、だからこそ日々の生活が刺激いっぱい、毎日新しい発見や成長を見つけることができ、とても充実した日々を過ごしています。これからも成長し続けられるよう、がんばっていきたいと思います。

最後まで読んでくださり、ありがとうございました!



着物を着ての授業



「日本語1」の授業の様子



2018年の3月に博士前期課程を修了した田慧昕(デンフィシン)です。現在大阪府下の公立小学校で日本語指導加配教員として勤めています。私は中国生まれ、中国育ちの中国人です。その私がなぜ、日本の公立小学校で教員として勤めているのか、また、母語話者教員として感じた課題や役割と使命について考えたことをお伝えしたいと思います。私と同じように、留学で来日し、日本の教育現場で働きたいと思っている方に、少しでも勇気、希望を与えられたら幸いです。

日本の公立学校で教員になるまでの道のり

私は2011年3月に留学で日本にきました。日本語教師を目指し、2012年に大阪大学の外国語学部日本語専攻に入学し、2016年に同校の言語文化研究科に進学しました。私が、初めてCLD児(多文化多言語の子ども)、母語・継承語教育という言葉を知ったのは、2014年の櫻井千穂先生の授業でした。しかし、当時の私は正直、母語・継承語教育は公教育に要求すべきものではなく、家庭教育でやるべきだと考えていました。バイリンガルに育てたかったら、国際学校に行けばいいじゃないか、いわゆるエリート教育の先入観がすごく強かったのです。そんな考えの中、2014年の夏の集中講義で、トロント大学の名誉教授の中島和子先生の授業を受けて、衝撃を受けました。バイリンガル教育はエリート教育に限らず、特にグローバル化、国際化を唱える今日の社会では、CLD児の母語・継承語教育が家庭だけで抱える問題ではなく、社会全体で考えていかないといけないこと、それは権利であり、ホスト国の義務でもあるということを考えさせられました。そして、4回生の時に、真嶋潤子先生(大阪大学名誉教授)が提唱する、「なにもなくさない日本語教育」という考えを知り、そこから、ずっと2018年の3月まで、真嶋先生の元で、年少者の言語教育、特に母語・継承語教育について学んできました。

私が公教育に携わり始めたのは2014年の夏です。櫻井先生の研究のお手伝いで、中国語のDLA(文部科学省により2014年に公開されたCLD児のことばの力を測るための対話型アセスメント)を実施するために小学校に行きました。その後、ボランティアとして小学校で中国語の絵本の読み聞かせや、教科内容の翻訳などの活動をしました。2015年に自立支援通訳に登録され、母語・継承中国語の授業に携わり始めました。自立支援通訳として、教育活動を行う中で、いくつかの課題に直面し、その課題解決に向けて、自分はどのように教員に働きかけたらいいのかをすごく考えさせられました。自立支援通訳は、週に数時間といった時間の制約や教員免許を持っていない者は一人で授業できないなど制度上の規定により、活動範囲が自ずと制限されます。また、学校運営に直接携わらないので、子どもたちを取り巻く環境を変えることは非常に難しいと実感しました。学校現場に入り、先生と子ども、保護者と関わっていく中で、公教育で教員になりたいという気持ちが湧いてきました。そこで、2016年4月から大学院前期課程を履修する傍らで、教員免許を取りました。2018年4月には、学校教育サポーターとして、現場の先生のサポートするスタッフとして中学校で勤務し、2019年4月からは日本語指導加配教員として小学校で働き始め、現在に至ります。

日本人教員と自立支援通訳による協働プロセス

前述の通り、自立支援通訳という立場では、色々と制限されるのは事実ですが、日本語教室の先生との話し合い、相談を通して、できることもたくさんあります。私が自立支援通訳として主に携わっていた仕事が母語・継承中国語の授業です。授業の主体は、日本語指導加配教員で、自立支援通訳は補助的な立場です。しかし、授業をしている中で、やはりいろいろと考え、思うことがたくさん出てきます。その考えを素直に日本語指導加配教員に相談したら、快く受けてくださり、共に実践することができました。

当時、私が思っていた小学校の母語・継承中国語の課題は以下の4点です。①校内の取り組みになりがち、②アイデンティティの育成に焦点をあてる授業プランがない、③教科との連携性が薄い、④日本人児童は聞き手にとどまっていることです。①の課題解決に向けて、校内だけではなく、校外とのつながりを取り入れた活動をしました。例えば、中学校区内のCLD児と交流したり、中国の小学生とビデオ交流をしたりしていました。②の課題解決にむけて、ルーツについての学習をしました。CLD児は常に、自分は何人なのかについて周りに聞かれ、自問自答しやすい立場に置かれています。自分は日本生まれ日本育ちだから、日本人だと思う、でも、国籍は中国だし、両親にも中国人だと言われている、社会と家庭の狭間に追い込まれ、どうすればよいのか分からなくなりアイデンティティが揺れる話を多く聞きます。私は何人であるかは他人が決めるのではなく、自分が決めることだと考えています。私はだれなの？どうしてここにいの？将来はなにをしたいの？といった問いに自分で答えられるような子どもになってほしいと考えています。その判断の材料、根拠の一つとして、自分のルーツについて知ることが大切だと思い、小学校の最後となる6年生の3学期でルーツについての学習を行いました。「自分のルーツ」「将来の夢」と「中国についての紹介」の3つのテーマをポスターセッションの形で、中国語と日本語の両言語で発表しました。当日、在籍学級の児童と保護者を目の前に、子どもたちは自信を持って、両言語で堂々と自分のルーツについて語ることができました。この活動を通して、自分がだれなのかの問題に直面した時、深く考え堂々と自分で答えるような大人になることを切実に願っています。この時期に、考えを行動に起こさなければ、何も変わらないことが分かりました。もちろん相談しても、様々な制約の中でできないこともあります。それはそれで、日本の学校の仕組みや規則を知ることができ、自分の知識が増えることに繋がるので、結果はともかく、まずは自分の考えを相談する試みが大切だと思いました。

日本人教員と母語話者教員による協働プロセス

私は2019年4月から、日本語指導加配教員になりました。母語・継承中国語の授業以外に、学年の集団の取り出しによる国語指導、日本語指導、中国語による教科指導、在籍学級の多文化共生学習も担当することになりました。

そこで、二つのことに励みました。一つ目は、学級担任と連携して、学級の児童も参加できる母語・継承中国語の授業作りです。例えば、5年生の国語科と連携して、CLD児が在籍学級で漢詩の授業をしたり、外国語の時間に、高学年による中国語講座を行ったり、音楽の授業で、中国語で歌を歌ったりしました。子どもたちから「中国語で春暁を詠むのは楽しい」「中国語をしゃべるようになりたい」「みんなと中国語で歌って、楽しかった」などの感想が寄せられました。また、日本人児童が分かるように掲示物や成果物はすべて二言語で作るようにしました。例えば、校区内にある物産店の紹介のポスターを二言語で作って、掲示しました。それを見た日本人児童やその保護者が中国のお菓子などに興味を持ち、物産店に行って買って食べたそうです。二言語で掲示物を作ることで、日本人児童や保護者がCLD児の言葉や文化に触れ、話題が広がり、さらに進んでCLD児の文化を味わうことができると思います。今日の日本社会では、母語・継承語の学習と聞いたら、そのルーツを持っている子どもだけのためにという印象がまだ強いのではないのでしょうか。学級の児童が参加すると言っても、発表を見るなど受け身の時が多いというのが現実です。しかし、教員間の連携をベースに教科と連携するなど工夫をすれば、学級の児童も参加できるような学習活動に転換することが可能であることを強調したいです。これがすべての子どもにとって有益な教育であり、多文化共生の真義でもあると考えています。

また、多文化共生の授業では、児童が主体的に多文化共生社会の構築について考え参加することを目標に、6年生では、日本に住んでいる外国人や外国に住んでいる日本人の生活や直面している課題などについて、動画や当事者の話を通して考え、みんなで仲良く生活できる社会をつくるために、今の自分たちにはどんなことができるのかを考えました。児童らは自分の経験や当事者の話から、誤解や差別が生じるのは、違う文化を持っている者を自分の常識で判断してしまうことが原因ということに気づきました。そして、自分の考えはすべてではない、まず違いを知ることが大切という意見が出て、そこで色々な文化や、その違いを調べ、まとめ、発表会などを通して保護者や地域の方に紹介することをしました。児童らは学校の中で異文化・異言語について知り、体験し、考えることを通して多文化共生の意識が芽生えたと思います。これは多文化共生社会の担い手を育てる上で、とても大切なことだと思います。私はその種を撒く人だと考えています。

二つ目は、CLD児と保護者が安心できる環境を整えることです。普段の教育活動の中で、大切なお知らせをその言語で作成し、届けることはもちろんですが、社会情勢が急激に変化した時に、どのように保護者と連絡をとればよいのか、特に行政ではどのようなことができるのかをすぐ考えさせられました。2020年1月の新型コロナウイルスによる、突然の休校発表、緊急事態宣言。児童も保護者も不安でいっぱいでした。しかし、どこに、だれに、どう聞いたらいいのか全然分からないというのが現状でした。行政から届いた文章は難しく、親にとっては難解です。教育委員会は、中国語版と英語版のお知らせを作るのが限界でした。では、フィリピン、ベトナムの親はどうするの？英語ですべてが対応できるのかという不安が湧き、管理職と日本語担当の先生と話し合い、「やさしい日本語」を活用したお知らせ作りをするように市外教(在日外国人教育研究協議会)を通して各学校に呼びかけました。情報マイノリティになっている保護者のところに一刻も早く正確な情報が伝わるように働きかけました。

そして、一教員として校務分掌も担当し、学校運営に携わり始め、日本語教室の在り方を見直しました。「なにもなくさない日本語教育」の方針を確立し、全職員に共有しました。「なにもなくさない日本語教育」とは「これまでに培ってきたものや背景などをリセットし、更新するのではなく、児童が持っている文化・言語・経験をもとに日本語教育を展開していくことで、自分に誇りをもてる子どもを育てる」という考えです。「なにもなくさい日本語教育」の方針に基づいて、本校では母語・継承語の授業は日本語教育の一環として捉えています。

母語話者教員の役割と使命

これまでの経験を元に、私が考えた母語話者教員としての役割と使命についてまとめてみました。大きく分けて三つあると思います。一つ目は、「つながり」を大切に活動を行うことです。学習面では、教科と母語・継承語のつながり、ルーツの面では、家庭とのつながり、中国とのつながり、環境づくりの面では、学校、行政、団体(市外教)とのつながりです。二つ目は、当事者意識を持って考え、発言することです。つまり、CLD児の保護者や子どもたちは何でどのように困っているのか、それを解決するために、和らげるために今の私にはどんなことができるのかを考え、行動することです。三つ目は、学級の児童が英語以外の外国語や文化に触れる機会を提供することです。外国語は英語だけではなく。英語以外の外国語や文化について知り、日本語や日本文化との相違を考え、自分の知識や考えをさらに広げることができると考えています。

母語話者教員の課題と展望

教員になり、活動範囲が広がり、たくさんの人と繋がることができました。しかし、それゆえに課題もたくさん見えてきました。私見ですが、現在の制度上では、母語話者教員への特別な採用枠がないため、どのような働き方を求めたらいいのか分からないというのが現場の偽らざる声ではないでしょうか。一般の教員と同じ働き方を求めるのか、通訳的な役割を求めるのか、それとも双方を求めるのか、特に小中学校では、その境が定かではないのが現実です。私が勤務している小学校では、母語話者教員の教員としての立場を明確にし、翻訳・通訳関係の仕事は自立支援通訳が担い、緊急時のみ母語話者教員が対応するなど自立支援通訳と母語話者教員の仕事範囲を明確に区別し、年度初めの日本語教室の説明会で学校全体に周知しています。

近年、少子高齢化社会による労働力不足の緩和の対策として、政府は外国人の就労や投資・経営管理のビザの条件緩和などを進めています。在日外国人数は今後も増えていく一方でしょう。それに伴ってCLD児も増え、国籍も多様化していくことが目に見えています。私と同じように、外国人で、公教育で自分の力を発揮したいと考える有志の方も増えてくると思います。そのため、母語話者教員が現場でどのような役割を求められているのか、どのような機能を果たせばよいのかが今後の大きな課題になると考えています。また、母語話者教員への特別な採用制度の考案も視野に入れるべきだと思います。私は、今後も「なにもなくさない日本語教育」を目指して、教育現場で奮闘しつつ、母語話者教員の立場のあり方について模索、提案していきたいと考えています。



日本語教室の伝統—獅子舞



はじめに

本稿は、2024年度5月3日(金・祝)～5月4日(土・祝)に行った日本学専攻の留学生見学旅行に関する報告である。なお、旅行の行き先は高知県香南市野市町であり、旅館かとり滞在了した。

旅行の概要

1日目は箕面キャンパスからバスで出発して、旅館かとり滞在了するまでにサービスエリアで10分ほどの休憩があった。移動にご同行して下さった二人の先生と、先に現地に着いていた他の先生とを合わせて、3名の先生方が私たちの引率をしてくださり、安全な道程であった。道中、レストラン「かつお船」で高地名物であるかつおの薫焼きを体験し、自分で焼いたかつおと一緒に昼食をとった。夕刻に旅館かとり滞在了し、荷物を置いた後、手結港の可動橋を見に行った。見学を終えて旅館に戻り、入浴後、皆揃って浴衣に着替えて、旅館の宴会場の夕食に参加した。宴会パーティーでは歌舞伎を拝見した。「大阪大学留学生絵金歌舞伎、弁天座のワンランク濃い交流会」があり、高知県の伝統的な歌に合わせて現地の方々と一緒に踊ったり、歌ったりした。

2日目は、7時に朝食をとってから、旅館を出発した。この日はまず、赤岡町内の弁天座で巻き寿司を作る体験をした。留学生は2グループに分かれて、一つのグループは着物を着て町を歩き、もう一つのグループは、絵金蔵、弁天座を見学して、歌舞伎を体験した。歌舞伎では、白波五人男(駄右衛門、弁天、忠信、赤星、力丸)の五人と捕手の五人に分かれて、捕手の人は白波五人男に一人ずつ付いて所作をした。実際に歌舞伎の化粧やかつらをして、役を体験した。筆者は歌舞伎体験で捕手を体験した。昼食は、朝に作った巻き寿司を食べた。その後、抹茶とお菓子を食べ、大阪に帰った。4日の夜10時ごろに箕面キャンパスに戻って、一泊二日の旅行が終わった。

旅行の感想

旅行の前に見学旅行しおりをもらい、そこには全般的な注意事項、入浴マナー、見学旅行における案内・注意事項、もしものときの安心シート(救急医療情報)、持ち物リストが含まれており、また、旅行中にも先生からの指示やガイダンスがあり、安全だった。また、出発前は、日本ではそんなに渋滞がないだろうと思っていたが、ゴールデンウィークの祝日で大阪から高知県へ行く間に長い渋滞があった。帰る時も、行く時より長い渋滞があった。このことから、日本でも場所や時間によって渋滞があることを実感した。

レストラン「かつお船」では温かいおもてなしを受けた。初めての薫焼きの体験が楽しかった。自分で焼いたかつおと他の食べ物が美味しかった。筆者はイスラム教徒の人なので、ハラルフードしか食べられないのだが、旅行に行く前に食事の配慮について尋ねられ、筆者が何を食べられるのかを聞いてくださり、宴会パーティーでは幸せに食事を楽しむことができた。食事に関してこんなにも配慮してくださり本当に感謝している。日本では、人にこのような宗教的な話題を持ち出すことはあまりないが、それでも相手の気持ちを尊重しながら、相手の感情に焦点を当てる形で話を進めてくれることが多く、ありがたかった。

宴会パーティーで伝統的な歌を歌い、それにあわせて踊ったのが面白かった。日本の伝統的な宴の文化を体験した。弁天座で皆一緒に長い巻き寿司を作ったのも初めての体験だった。弁天座を出る前

に伝統的な仕方でお婆さんに抹茶とお菓子を出していただきとても美味しかった。それはまさに日本のホスピタリティだったと思う。

高知県の手結港は江戸時代の日本最古の掘り込み港湾である。可動橋の隣にある階段から遠くまで緑形式が見える。可動橋渡れる時間は1日に7時間だけである。橋の横にのぼることができる高い場所があり、そこからの景色がとても綺麗だった。

歌舞伎体験で捕手をする前に練習や、準備があって、弁天座の人々が優しく教えてくれた。歌舞伎の化粧をすると顔が元の顔と全く違うものになってしまうことに驚いた。筆者はイスラム教徒なのでヒジャブを着けているが、体験した役が捕手だったこともあって、着けたままでも歌舞伎の体験をすることができ、貴重な体験ができた。

おわりに

留学生が日本の文化・習慣に触れて体験するのにこのような旅行はおすすめである。二日間、日本人の生活を体験できるいい機会だろう。日本の食べ物や、日本語、日本の環境など色々なことが体験できて、いい経験になる。

短い期間だが、日本人としての生活を二日間ほど体験する貴重な機会となった。例えば、日本の伝統的な食べ物を味わったり、日本語での会話を試みたりすることで、より深く日本の魅力を感じることができた。また、日本の美しい自然や歴史ある建築、温かい人々とのふれあいを通じて、教科書やオンライン情報では得られないリアルな日本を体験できた。これらの経験は、留学生にとって忘れられない思い出になるだけでなく、日本への理解と興味をさらに深めるきっかけになると感じた。



レストラン「かつお船」でかつおの薬焼きを体験



宴会パーティーで歌や踊り



宴会パーティーでの先生方と学生たち



先生の歌舞伎を拝見



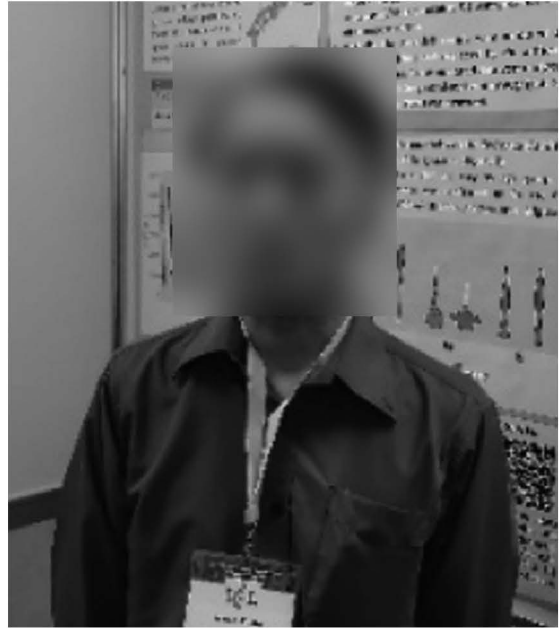
歌舞伎体験



巻き寿司の体験

2024年10月に着任し、あっという間に半年が経とうとしています。不慣れなことばかりでご迷惑をおかけしておりますが、講座の先生方や事務職員の皆様をはじめ多くの方に支えていただき、まずは学期を無事終えることができました。この場を借りて感謝申し上げます。

私は元々関東の八王子出身で、留学時代を除いてずっとその辺りで暮らしていました。旅行が好きで大阪を含め全国各地に行ったことはありましたが、ほかの地域で生活するのは初めてのことでした。とはいえ、不便はほとんど感じていません。千里中央や箕面萱野周辺にはたくさんお店があり、家賃も手頃でむしろ首都圏よりも住みやすいかと思うぐらいです。大学の前に電車が延伸し、新大阪や梅田からも一本で行けるようになっていきますね(私は以前の状況を知らないのですが)。八王子の辺りは新幹線の駅や空港からだいぶ離れていて、遠出する際には本当に苦労していました。



ところで八王子には高尾山というちょっとした観光地があるのですが、そこは「明治の森高尾」という国定公園になっています。驚いたことに、箕面の山も「明治の森」を冠する国定公園になっているようで、不思議な縁を感じます。明治100年を記念して制定されたもののようですが、全国で箕面と高尾だけのようですね。先日初めて滝のほうまで行ってきたのですが、とても良い所でした。周辺の街並みも少し似ているところがあって、千里ニュータウンの団地は実家の団地とそっくりです。ある時バスから見た「タヌキ注意」の看板は、「平成狸合戦ぽんぽこ」の舞台となった多摩ニュータウン(八王子の近くです)を思い起こしました。そんな感じで、箕面周辺の環境にはすぐに馴染めたように思います。

一方でやはり感じるのはことばの違いです。私は音韻論・音声学を専門にしているのでむしろ楽しんでいて、日常生活が語学学習＋方言研究という感じです。「箕面」という地名ひとつ取ってみても、こちらでは最後に音が下がりますが、関東のほうでは(もし言うとしたら)音が下がらないアクセント(平板型)になります。ちなみに同様のことは、「地下鉄」や「お会計」、「ミスド」や「スタバ」などにも当てはまりますね。全体的傾向についてはもちろん知っていたのですが、特に若者言葉などについて実際にどう発音されているのかを生で聞く機会を得られたのは貴重な体験です。まだちゃんとした研究という感じにはなっていませんが、「アプリ」や「PiTaPa」はどうして共通語と同じ言い方なんだろう?などと考えているところです。

授業でもこういったアクセントの違いは紹介するのですが、結構多くの学生に関心を持ってもらって

います。東京のある大学で音韻論の授業をやっていた時は、受講者の多くが首都圏出身で共通語しか知らず、自分の発音についてあまり意識していないという感じでした。一方大阪大学では、多くが自分の方言と共通語の言わばバイリンガルで、少なからず発音に対する意識が働いているように思います。また面白いことに、「関西弁」話者の中でも発音に差があるようで、先日は「豊中」の読み方で違いが見られました。また中国地方など、西日本だけど「関西弁」ではない地域出身の学生も結構いて、方言分布の話に実感を持って納得してくれているようです。多少なりとも自分の専門分野が役立ってくれて、とてもやりがいを感じています。

授業関係でもう1つ言うとなれば、様々な言語を専攻している受講者が集まるのも、箕面キャンパスの面白さですね。日本語専攻だけでも何かしらの専攻語(留学生なら母語)があります。言語学概論でのコメント欄に「〇〇語ではこうなっている」と書いてくれる学生も多く、自分も勉強させてもらっています。私は元々スラヴ諸語をテーマに博論を書いており、世界の言語の多様性およびそこから見えてくる普遍性に関心を持ってきました。こうした貴重かつ楽しい環境で、教育・研究にいつそう励んでゆきたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



渡部直也『ウクライナ・ロシアの源流～スラヴ語の世界～』, 教養検定会議, 2024.

拙著を紹介するのは何とも気恥ずかしいのですが、この本はウクライナ語やロシア語などが属する「スラヴ語派」の言語に関する入門書、および昨今のウクライナ情勢におけることばのありようについてまとめたものです。前半でスラヴ諸語の歴史、発音・表記および文法について概説し、後半ではスラヴ世界における社会と言語の関わり(社会言語学)、特にウクライナにおけるウクライナ語およびロシア語の状況を述べています。博論でスラヴ諸語の音韻論をテーマにしていたのですが、昨今のウクライナ情勢もあって執筆の機会を頂きました。

本書の内容から、少しでもスラヴ諸語についてお話しましょう。言語についてあまりご存知ない方でも、「スラヴ」という言い方は世界史などで聞いたことがあるでしょうか。スラヴ語派はインド・ヨーロッパ語族の一角を成しており、西はチェコやポーランド、東はウクライナやロシア、南はクロアチアやブルガリアなど、実はヨーロッパのたいへん広い範囲に分布しています。

同じ語派に属する言語ですから当然類似点が多いわけですが、様々なバリエーションも見られます。スラヴ語派はさらに東・西・南の3グループ(語群)に分かれているのですが、歴史的経緯からグループ内での相違点、また逆にグループを越えた共通点もあるのです。一例を挙げると、ウクライナ語・ベラルーシ語・ロシア語はともに東スラヴ語群に属しますが、ウクライナは一部ポーランドの領域に入っていたこともあり、ウクライナ語は特に語彙面でポーランド語(西スラヴ語群)とよく似ています。結果的に、系統的に近いとされるウクライナ語とロシア語は、かなり違ったものになっているのです。ただし、両言語の中にも方言的バリエーションがあり、二項対立というよりはグラデーションのような連続体を成しているというのが正確でしょう。

さて、現在もウクライナとロシアの戦争は終わりが見えず、当然ですがウクライナにおける反ロシア感情は高まるいっぽうです。元々東部・南部を中心にロシア語を母語とする国民も多く、ウクライナ語とロシア語の両方が話せる人々が多数派を占めています。ただロシアの全面侵攻以降に行われた世論調査では、使用言語をロシア語からウクライナ語に切り替える動きも確認され、「ロシア語離れ」と言える状況です。両言語の差異を強調する論説も目立ちます。

どうしても政治や軍事に関する報道が先行してしましますが、状況を正しく理解するためには、背景にある言語や文化を考えることが不可欠ではないでしょうか。ただ日本では日本語を母語とする国民がほとんどですから、国と言語を1対1の関係で捉えてしまいがちですね。日本の状況に置き換えて少し考えてみると、「言語」としては1つの日本語でも様々な方言があり、いわゆる関西弁と共通語でも、特に発音面はかなりの違いがあります。ウクライナの多くの人々がロシア語も使えることを考えると、ウクライナ語とロシア語の違いは(現地の体感としては)日本の方言間ぐらいのものなのかもしれません。日本は幸いにも1つの国として平和に存在していますが、もし西日本と東日本が違う国になっていたら……などと想像してみると、イメージが湧いてくるでしょうか。言語がアイデンティティの形成に重要な役割を果たしていることは確かですが、言語と国籍(あるいは民族)をそのまま結び付けてしまうのも問題です。

本書はごくごく一部を概観したのですが、戦争という惨禍をきっかけに、ことばの持つ役割について今一度考えてもらえればと思います。

【日本語教育実習・授業報告】

大阪大学外国語学部日本語専攻では、日本学生支援機構大阪日本語教育センターを始め、複数の日本語教育機関に少人数のグループで日本語教育実習をさせていただいています。日本語教育実習に参加するためには、指定された科目を履修し、模擬教壇実習を修了していなければなりません。その他、休学して海外の日本語教育機関でのインターンに参加したり、国内の日本語教育機関に非常勤講師として勤務したりする人たちもいます。

日本学生支援機構大阪日本語教育センターでの日本語教育実習報告

寒川 ちなつ 白崎 未桜

1. はじめに

2024年11月14日（木）から20日（水）まで5日間、日本学生支援機構大阪日本語教育センターにて日本語教育実習を行う機会をいただいた。本稿は、実習を通して得た気付きや学び、反省を記すものである。

（文責：白崎）

2. 実習概要

実習先の大阪日本語教育センターは、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が国の支援を受けて運営しており、日本の高等教育機関に進学を希望する外国人留学生を対象とした日本語教育機関である。文部科学大臣により「準備教育課程」に指定された予備教育機関として、日本語教育及び基礎科目（数学、物理、化学、英語など）の教育を行っている。国費留学生や外国政府派遣留学生のみならず、私費留学生も受け入れており、現在は36の国と地域から来日した150人の学生が在籍している。1クラス20人以下の少人数体制で、毎週5日、毎日約6時間の授業を実施している。また、授業では大阪日本語教育センターの独自開発教材を使用している。

5日間の実習は「授業見学」「教案指導」「教壇実習」で構成されていた。初日はオリエンテーションと実

習の流れの確認が行われた。その他の時間は授業を見学させていただいた。見学は、実習で担当させていただいた1組（10月入学、初級クラス）の授業だけでなく、中上級クラスも含まれ、様々なレベルの授業に参加することができた。2日目からは、教壇実習の一環として「暗唱・書き取り」を担当した（表1 太字部）。「暗唱・書き取り」は実習生2名が隔日でそれぞれ2回ずつ行った。教案指導に関しては、実習前の打ち合わせで伝えられていた教壇実習の担当課に応じた教案を初日に提出し、ご指導いただいた。2日目、3日目も同様にご指導いただき、それぞれ教案を修正して、実習に備えた。そして、4日目、5日目は実際に教壇に立ち、授業を行った（表1 網掛け部）。授業は1コマ50分であるが、教壇実習は1コマを2人で分けて25分ずつ担当した。

（文責：寒川）

3. 授業見学について

今回見学する機会をいただいたのは、初級クラスの1組～4組と中・上級のA組、E～H組、G組と日本事情演習の授業、そしてJLPTのN2級取得を目指すN2③クラスである。それぞれの授業で先生方が学生のレベルや教材の内容に合わせて授業をされていた。

（文責：白崎）

表1 実習のスケジュール

	11月14日	11月15日	11月18日	11月19日	11月20日
1	1組 見学 （暗唱・書き取り）	1組 実習 （暗唱・書き取り）	1組 実習 （暗唱・書き取り）	1組 実習 （暗唱・書き取り）	1組 実習 （暗唱・書き取り）
2	オリエンテーション	2組 見学	H組 見学	実習準備	G組 見学
3	1組 見学	教案指導	教案指導	1組 実習	実習準備
4	3組 見学	E組 見学	1組 見学	実習反省・指導	1組 実習
5	日本事情演習 IB	F組 見学	A組 見学	N2③	実習反省
6	実習・教案作成	1組 見学	4組 見学	J組 見学	1組 見学

3.1. 初級クラス

初級クラスは担当した1組を中心に、同じく10月に入学した学生で構成される2組、3組、4組の授業も見学させていただいた。授業では、先述のセンター独自教材『留学生のための日本語初級』が使用されていた。授業は基本的に、導入（イントロ）・練習（ドリル）・新字・本読み・新しい言い方（文型）・内容ドリル・練習帳の順で進められる。導入では、教科書を開けさせることなく、教師の語りのみでその課の場面を学生に想像させることになっている。学生がその中に出てくる新出の文型や語彙を理解し、ある程度自然に発話できるまでリピートや質問を繰り返していた。練習の段階では、学生を順番に指名し、全員に発話する機会を与えることで定着を図っていた。特に、1組は日本語レベルの高い学生が多かったため、教師のキューに対する反応も素早く、非常にテンポよく授業が進められていた。様々な授業を見学させていただいたが、全てに共通していたのは、学生自身のことを答えさせるように工夫された質問が多かったということである。自分のことを話させることにより、新しい文型の理解が促進されたり、クラス内の活発なコミュニケーションのきっかけになったりすることが分かった。

一方で、教師の問いかけに対して反応が薄いクラスもあり、そこでは教師が例文や絵カードを使って、とにかく何度も何度も学生に発話させていた。口を慣れさせることが発話への負担軽減につながり、学生たちの反応も徐々に良くなっている様子であった。教師は学生たちのレベルや様子を考慮し、臨機応変に授業を展開していく必要があることを実感した。

（文責：寒川）

3.2. 中級・上級クラス

中上級のクラスでは、センターオリジナルの教科書である『留学生のための日本語中上級』のテキストを用いた授業がなされていた。クラスによって進度が違っていたため、同じテキストの異なる課を取り扱っておられる授業を見学することができた。授業では、教科書に載っている文章を読み進めながら、文章の内容やテーマに関する質問、新しい文法や表現に関する質問など先生方の問いかけに対し、学生は積極的に質問に答えていた。新出表現を用いた作文を作るという場面では、持っている日本語の知識でユーモアのある回答をする学生が多く、先生

と学生の穏やかな雰囲気が印象的であった。先生のお取りはからいにより、いくつかのクラスでは交流の場を用意していただけた。専門学校や大学への進学を希望している学生が学んでいる日本語学校であるだけあり、大学での生活や進路選択についての質問が多かった。

（文責：白崎）

3.3. 日本事情演習

日本文化について学ぶために開講されている授業が「日本事情演習」である。見学したのは、日本での面接と年賀状について扱う授業だった。面接に関する部分では、面接の際の身だしなみや面接時のマナーを中心に学んでいた。専門学校の面接を控えている学生が多かったため、授業内では専門学校の入試を想定して面接の練習を行う場面があった。その際に面接官役として授業に参加させていただいた。年賀状に関する部分では、先生が私たち実習生に手紙や年賀状についていくつか質問をしてくださった。

（文責：白崎）

3.4. N2③

この授業はJLPTのN2受験対策として実施されているものである。主に文法と読解の問題に取り組んでいた。まず学生が問題を解いてから、答え合わせ、解説という流れで進められていた。読解に関しては、文章の解説のみならず、解答する際のコツについても触れられており、実践的な授業であるという印象を受けた。

また、見学させていただいた中では唯一、パワーポイントを用いて実施されていた授業であった。実際に教師が書き込みする様子を見せることで、視覚的にも解答の手順が分かりやすく示されていると感じた。

（文責：寒川）

4. 教壇実習について（寒川）

4.1. 暗唱・書き取り

大阪日本語教育センターでは、毎日2回の「暗唱」（1限目と4限目）と1回の「書き取り」（1限目）が実施されている。暗唱は、学生がテキストに対応した会話形式の暗唱文を事前に覚え、ランダムに指名されたペアで発表するというものである。教師はその場で会話を聞き、必要に応じてフィードバックを

与える。書き取りでは、指定された既習の課の新出文法や語彙を織り交ぜた 5 文を教師が作成、音読し、学生はノートに正しく書き取りを行う。特に、新出の漢字やカタカナを積極的に文章に取り入れることで、定着を図る目的がある。教師は 1 つの文章につき計 3 回、それぞれスピードを変えて読み上げる。実施後、ノートを回収し、漢字も含めて正確に書くことができているかを確認する。

筆者らは、1 限目の暗唱・書き取りを実習 2 日目から担当させていただいた。なお、作成した書き取りの文章は事前に担当の先生に確認していただき、授業に臨んだ。

筆者は 11 月 15 日と 19 日に暗唱・書き取りを担当した。初めて暗唱を担当した際には、細かい助詞の間違いを指摘したり、正確な発話ができるまで何度も言い直しをさせたりすることが疎かになってしまった。助詞の間違いに気づいた際、流れを遮ってすぐに訂正すべきか迷い、結局何も指摘しないまま進んでしまった部分もあった。初回を終えて、遠慮は学生のためにはならないと深く反省した。

書き取りでは、音読のスピードや学生の出来具合を見ながら進めることに難しさを感じた。学生によって書くスピードが様々で、1 番遅い学生に合わせるとかなり時間をとってしまうことになるため、次の文章を読み始めるタイミングの判断に悩まされた。指導教官の先生からは問題文の間隔が少々長すぎるというフィードバックを頂いた。2 回目の暗唱・書き取りでは 1 回目の反省と頂いたフィードバックを意識して取り組むことができたと感じている。学生の間違いも、できる限り自然な流れで訂正することを心掛けた。

暗唱・書き取りは通常の授業とは異なり、決まった流れや、手順を着実に踏むことで円滑に進められるものであった。もちろん臨機応変にフィードバックを与えねばならないという緊張感もあったが、教壇実習を控える筆者らにとって、学生の前に立って話すことに慣れる良い機会となった。

4.2. 教壇実習

表 2 実習内容 (寒川)

日付	授業内容
11/19	受け身形

	<ul style="list-style-type: none"> ・無生物主語 ・迷惑受身
11/20	敬語 <ul style="list-style-type: none"> ・いらっしゃいます ・まいります ・おります ・なさいます

教壇実習の初回は、無生物主語の受身と迷惑受身の導入・練習を、2 回目は上記 (表 2) の敬語の導入・練習を担当した。

教案指導の際には、変換練習の文章を増やし、現実で使えるような例文にした方が良いというご指摘を頂いた。特に、迷惑の受け身は状況と合わせて考える必要があるため、自然な例文の作成に時間を要した。実際に使用されている場面がすぐに思いつかない自身の想像力の乏しさを痛感した。2 回の教案作成で配慮した点としては、自然な流れで導入することと、授業全体の構成を分かりやすいものにすることの 2 点が挙げられる。授業構成の分かりやすさに関しては、学生のスムーズな理解を促進するだけでなく、自身が授業を進めるうえでも、大いに役立ったと考えている。授業構成を何度も検討する中で全体の流れが頭に入り、実際の授業では、時間を考慮して省略してもいい部分や、逆に必ず押さえておきたいことをその場で適切に取捨選択することができた。

19 日の教壇実習では、学生とのコミュニケーションを取りながら想定した流れで授業を展開できた一方で、練習のパートにおいて曖昧なキューを出して、学生を混乱させてしまいそうになる場面があった。また、板書をしながら授業を行うのは筆者にとって初めての経験であり、授業後に指導教官の先生から文字を書くタイミングやホワイトボードの使い方に関するアドバイスを頂いた。特に、口頭で文を言ってから板書し、集中するポイント (耳か目か) を絞る方が学生にとって分かりやすいというフィードバックは大きな学びとなった。20 日の実習は初回の反省と学びを生かし、どの情報をどの位置に配置するかといった板書計画を立ててから授業に臨んだ。また、キューを丁寧に出すことや、敬語を使用する状況を明確にイメージできるよう十分に説明することを意識した。一方で、タイムマネジメント等、後悔の残る部

分もある授業となった。

2回の教壇実習を通して、日本語教師としての未熟さを痛感した。それと同時に、学生と関わり合いながら授業を作り上げていく楽しさを知ることができた。丁寧な指導のもと、一から授業を作り上げる中で、多くの気づきや新たな視点を得ることができた。この実習での経験を糧に、今後も自己研鑽に励んでいきたいと思う。

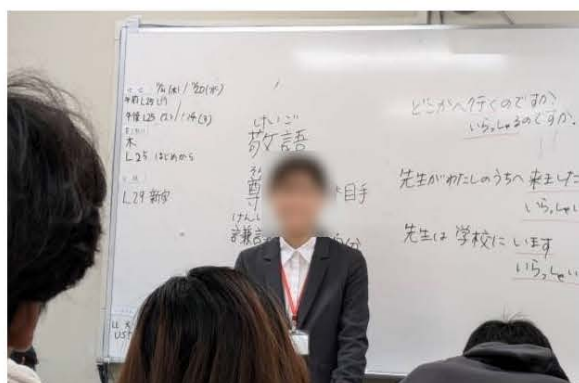


写真1 教壇実習風景（寒川）

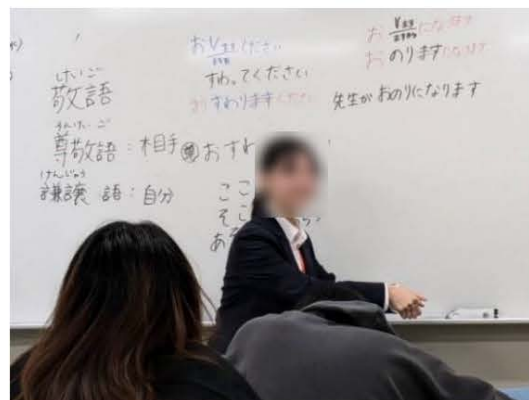


写真2 教壇実習風景（白崎）

表3 実習内容（白崎）

日付	授業内容
11/19	受け身形 ・わたしは～にVられました ・私は～に～をVられました
11/20	敬語 ・お～します ・お～ください ・お～になります

5. 教壇実習について（白崎）

5.1. 暗唱・書き取り

11月18日と20日に暗唱文と書き取りを担当した。音読ではどのタイミングでフィードバックを返したら良いかが分からなかったほか、そもそもフィードバックを返さなければいけない助詞の間違いを聞き逃してしまう、というミスをしてしまった。書き取りでは、既出の文章をどの程度改変したら良いかが分からず、教科書の文章をほとんどそのまま出してしまった。これに関しては、見てくださっていた先生からアドバイスをいただき、20日分は新出漢字を混ぜた書き取り文を作成することが出来た。一方で、読む早さがゆっくりだったというフィードバックや、単語のイントネーションが出身の関西のものであり、標準語のものではなかった、などのフィードバックをいただいた。やはり話すことに関してはまだまだ修行が必要であると感じた。

5.2. 教壇実習

教壇実習で担当した授業内容は表3の通りである。初級クラスであり、学生は入学してから2ヶ月しか経っておらず、思いのほか未習単語が多かった。そのため、例文に使う単語の選択に苦労した。教案を添削していただいた際には、単語の既習・未習のほかに、パターンプラクティスの例文の文法が自然でないものや、他の用法とも取れる文章についても指導していただいた。

1組が初級クラスの上級クラスであったこともあり、授業中は学生の多くがすでに文法事項を知っているようであった。また、新出単語に関しては添削をしていただいたうえで、1組が上級クラスということを見て新出単語も使ってみることにしたところ、単語を知らない学生もいたものの、フォローを入れると新出単語も理解できていた。

1日目では、活用形を動詞のグループ毎に出そうと思い、教案にも動詞をグループ毎に分けて書いていたのだが、誤って1グループの動詞を用いた活用練習中に2グループの動詞を出してしまうというミスをしてしまった。

授業後のフィードバックで活用形を書く際に1グ

ループの動詞は五段を意識させるような板書をする
こと、先に文法事項を説明してから板書をした方が
いいことなどを教えていただいた。

2日目の授業後には、前日に教えていただいたこと
を实践できていたというお褒めの言葉をいただいた
一方で、教案を見るために視線が下を向いている時
間が多かった、という指摘をいただいた。これに関し
ては、ある程度は教案の流れを頭に入れておいた方
がいい、というアドバイスをいただいた。また、「わ
たしが」という形で提示した文をリピートさせる際
に「わたしは」と、誤った助詞を提示してしまってい
る場面があったという指摘もいただいた。助詞のミ
スに関しては、コーラス後に助詞をもう一度確認す
ればよいというアドバイスをいただいた。

複数の先生方に授業をみていただき、フィードバ
ックをいただく貴重な機会となった。先生方にいた
だいたフィードバックを今後にも生かしていきたい。

6. おわりに

実習を通して、ごく一部ではあるが日本語教師の
仕事を体験し、具体的なイメージをつかむことがで
きた。同時に、理想の教師像について改めて考えるき
っかけとなった。

授業見学では、先生方が学生にわかりやすいよう
に内容はもちろんのこと、話し方や授業の展開、板書
にも工夫をされていることがわかった。そのような
工夫は、先生方が長年の教壇経験で培っておられた
ものであると、実際に授業を行ってみて実感した。ま
た、教壇実習では様々な観点からご指導いただき、自
分自身に足りない点やより良い授業の在り方を見つ
めなおすことができた。実際に日本語教師として働
き始めると、他の教師からフィードバックを受ける
機会は多くないであろう。だからこそ、この実習期間
中にたくさんの先生方から頂いたアドバイスや改善
点に関するコメントは、我々実習生にとって大きな
財産になった。

最後に、お忙しい中、丁寧にご指導してくださっ
た大阪日本語教育センターの先生方、熱心に授業に
取り組んでくれた学生の皆さん、そしてこの実習の
機会をくださった日本語専攻の先生方に心より感謝
申し上げます。ありがとうございました。



写真3 担当クラスの学生たちと

ドイツ・デュッセルドルフ大学での日本語教育実習報告

梅下 華琳

1. はじめに

本稿は2023年10月から2024年7月にドイツのデュッセルドルフ大学（正式名称ハインリッヒ・ハイネ大学）の現代日本学科（Modernes Japan、以下 Moja と略す）において行われた、日本語教育実習の報告である。デュッセルドルフは、ドイツ北西部に位置する都市で、ノルトラインヴェストファーレン州の州都である。多くの日系企業が進出しており、ヨーロッパで3番目に日本人が多い町として知られている。デュッセルドルフ大学はその南エリアの広い敷地にキャンパスを構え、中央駅から電車で約15分でアクセスできる好立地にありながら、落ち着いた環境を持つ総合大学である。

2. 日本語教育実習の概要

本実習に参加した教育実習生（以下、実習生）は2名であった。実習では約10か月、2学期間（秋冬学期・春夏学期）にわたって、主に(1)TA（ティーチングアシスタント）、(2)宿題添削、(3)教壇実習の3つの業務に携わった。それぞれの業務では指導教員にあたる日本人日本語教師の先生方にご指導いただいた。

現代日本学科で日本語を学ぶ学生数は、初級（日本語Ⅰ・Ⅱ）4クラス約80名、中級（日本語Ⅲ・Ⅳ）3クラス約50名である。どのレベルも、週5日、1

日1コマ日本語の授業があり、その都度プリント1～2枚の宿題を出し、語彙リストや教科書の練習問題の予習も課すというカリキュラム編成になっている。初級の授業は、現代日本学を専攻する学生だけでなく、副専攻とする学生も受講できるのに対し、中級の授業は、現代日本学を専攻する学生のみが受講できる。

さらに、本実習では、秋冬学期の修士課程の授業にもTAとして参加させていただく機会を得た。アカデミックジャパニーズを受講している修士課程の学生は6名ほどであった。

表1は秋冬学期に割り当てられた実習担当時間割である。以下、業務内容について項目を分けて説明する。

2.1 TA

TAとして参加した日本語Ⅰ～Ⅳの授業では、誤字や発音をチェックしたり、ペアワークや質問対応を行ったりした。教室の中を歩いて学生に声をかけることにより、授業の雰囲気をつかみ、学生との接し方を学ぶことができた。修士課程の授業では、研究発表が期末課題として設定されていた。プレゼンテーションの指導のほか、イントネーションや長音、アクセントなど発音面の練習をサポートした。

表1 実習生の時間割（秋冬学期）

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
8:30～10:00	日本語Ⅰ	（日本語Ⅲ）	日本語Ⅰ 教壇実習		日本語Ⅲ
10:30～12:00	日本語Ⅰ	日本語Ⅲ	日本語Ⅰ 教壇実習		（日本語Ⅲ）
12:30～14:00				アカデミック ジャパニーズ	日本語Ⅲ
14:30～16:00		（日本語Ⅲ）			

2.2 宿題添削

宿題の提出はデュッセルドルフ大学のオンラインシステム上に行われる。提出された宿題をダウンロードし、タブレット端末で添削した後、再度システムにアップロードして学生に返却するという流れだった。基本的に提出翌日に返却するのが決まりであり、教員と実習生で分担して行った。初級と中級の宿題提出がかぶった時は、1日に40名分の宿題を添削することもあり、時間と労力がかかる作業である。しかし、この作業を通して、学習者がつまづきやすいポイントを知ることができるため、授業を構成する際のヒントになったり、質問への返答をブラッシュアップできたりとさまざまなところで役に立った。また、学期中5回ほど、初級も中級も作文の宿題があり、休日の過ごし方や好きなもの、地元のおすすめの場所といったテーマで400字程度の文章を添削した。はじめの頃は横書きの形式に戸惑ったり、カタカナ表記の仕方に正しいかどうか不安を感じたりしたが、辞書やインターネットで調べるうちに次第に慣れていった。学生のことを知る良い機会になり、課題のファイルに感想やコメントをそえることで学生とのコミュニケーションもはかどり、とても楽しい経験であった。

2.3 教壇実習

水曜日の初級日本語Ⅰ・Ⅱの授業を2週間ごとにもう一人の実習生と交代しながら担当した。自分が担当していない週の授業にはTAとして参加した。

教材は『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語

初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）を使用した。授業内容はドリル練習が中心だった。学生は授業前に学習する範囲の文法解説ビデオを予め視聴するほか、実習生が担当する一つ前の授業で導入や文法の説明を受けることになっている。そのため、復習として軽くおさらいしたあとは、授業の大半を教科書の練習問題を解く時間や、オリジナルゲームによる文型練習の時間に使った。ただ、学期中3回ほど文型を導入することもあった。

教案は授業担当週の前の金曜日までに作成し、指導教員に提出しなければならない。フィードバックを受けることで効率的な進め方を学ぶ。学期全体のカリキュラムのほかに、週間の細かい授業計画書が配布されるので、それぞれに従って教案を作成した。指導教員の添削を参考に修正を加えたあと、パワーポイントを用意し、独自で考案したドリル練習に必要な教材を印刷するなどの準備をする。

授業後は、指導教員ともう一人の実習生からコメントを寄せられる。授業の構成や指示の出し方、目標とする技能（読む・話す・聞く・書く）のどの技能に集中させるかなど、さまざまな視点でアドバイスをもらった。

3. ブロックコース

春休み中に希望者のみが参加できるブロックコースという集中講座が開講され、私たち実習生は初級クラスを2日間担当した。『みんなの日本語初級Ⅰ』第1～17課で扱った文法・語彙・表現・漢字の復習ができる活動を実習生2人で考え実施した。表2は

表2 ブロックコースの授業内容

	1日目	2日目
1 コマ目 9:00～10:30	ウォーミングアップ タスク（＝プレゼンテーション）の 説明	作成したプレゼンテーションの内容を 確認・更新
2 コマ目 10:45～11:45	『みんなの日本語初級Ⅰ』 第1～17課復習	漢字プリント 第1～14課復習
(休憩)		
3 コマ目 12:45～13:45	プレゼンテーションで用いる表現の 練習	発表練習
4 コマ目 14:00～15:00	プレゼンテーションの内容をグルー プで作成	発表 振り返り

ブロックコースの大まかな実施内容である。今回のブロックコースでは、タスクベースでカリキュラムを組んだ。ブロックコースの開講前に、日本語でドイツの観光地についてプレゼンテーションを作ることと、その発表の様子を動画に収め日本人留学生からコメントをもらうことをメールで周知した。そのうえで、2 日間にわたるプレゼンテーションの作成に取り組んでもらった。当日までに割り振られた都市の情報を個人で集めておいて、1 日目でグループメンバーと共有してもらう形をとった。

ブロックコース終了後、学生に感想を書いてもらった。実際に留学生にすすめてできるというやりがいや、初めて日本語でプレゼンテーションをしたことへの達成感を肯定的に捉えるコメントが多かった。漢字学習については、部首について着目する観点が新しいというコメントをいただいた反面、初めて聞いた概念で分かりづらいという指摘もあったことから、まだ改善の余地はあると考えた。とはいえ、日本語Ⅰから日本語Ⅱへ進級する学生にとって良い復習の機会を作れたうえ、自分たち実習生にとってもカリキュラムを作る良い経験になり、とても有意義な学びだと思った。

4. その他の活動

実習外では、日本デーやDoKomi という日本のアニメのコミックコンベンションなど、日本文化に触れることを目的としたイベントやドイツ語・日本語ラウンジ、日本語学校といった日本語学習支援ボランティアの活動に参加する機会があった。さらに、定期的に Stanmtisch という Moja の学生だけで集まる食事会があり、そこで大学一年生から修士課程までの学生と楽しく交流することができた。さらに、華道体験ワークショップの手伝いや競技カルタ、着物、書道クラブなど、学生と一緒に学ぶさまざまな機会が存在していた。私は学生から声をかけてもらい、DoKomi で日本人アーティストのサポートやグッズ販売などを担当した。来場者の皆さんとの交流を通じて、多くのドイツ人が日本のコンテンツから日本語の勉強を始めたことが分かった。また、アニメならではの口語的表現の難しさや漫画のオノマトペとふりがなを読みこなすには時間がかかるという学習上の問題点も知ることができた。

5. 実習を終えて

実習を始めた最初の頃は、右も左も分からず、何より 90 分間の授業を一人でやることへの不安が大きかった。実習に行く前、大学の授業で 15 分間の模擬授業しかやったことがないため、それより 5 倍も長い時間をどのように組み立てればよいか、ドリル練習のレパトリーをどのように増やせるかが、さっぱり見当がつかなかった。また、分かりやすい説明のコツや学生との接し方など分からないことだらけで、果たして教壇に上られるか自信がなかった。また、提出した教案は毎度修正すべき箇所があり、授業が終わったあとも多くの反省点を残した。しかし、試行錯誤を繰り返しながら、ゆっくりだが着実に成長していると実感できた。全ては指導教員の的確なアドバイス、もう一人の実習生の温かいフォロー、学生たちのやさしさのおかげである。日本語教師としての知識だけではなく、みなさんに支えられ、励まされた経験を忘れずにこれからも頑張っていきたいと思う。

最後に、この機会を下さった大阪大学の筒井先生と櫻井先生をはじめ、さまざまなことを教えてくださった藤田先生や浜津先生などデュッセルドルフ大学の先生方、及びサポートしてくださったチューターや先輩方、ともに学び、成長した実習生の仲間へ心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



写真1 Moja の学生たちと

タイ・チュラーロンコーン大学での日本語教育実習報告

池内 優香

1. はじめに

筆者は2023年6月から2024年3月までの約10ヶ月間、タイにあるチュラーロンコーン大学にて日本語教育実習の機会をいただいた。筆者にとってタイへ行くのは初めてであったが、海外での日本語教育実習も初めての経験であった。本稿では、この教育実習について報告する。

2. チュラーロンコーン大学について

チュラーロンコーン大学は、1917年に設立されたタイで最初の高等教育機関であり、最も古い歴史を有する国立大学である(科学技術振興機構HP)。19の学部を有しており(チュラーロンコーン大学HP)、筆者は、文学部東洋言語学科日本語講座にて実習を行った。

東洋言語学科に所属する日本語専攻の学生、および、副専攻として日本語を学習する学生の数以下の表1の通りである。

表1 チュラーロンコーン大学日本語学習者数
(2024年1月時点)

クラス名	学年等	人数
日本語専攻	1年生	55人
日本語専攻(主専攻)	2年生	34人
日本語専攻(主専攻)	3年生	29人
日本語専攻(主専攻)	4年生	38人
日本語副専攻	N4以上	80人

アカデミックイヤーは、前期が8月初旬から12月初旬、後期が1月初旬から5月初旬である。

バンコクの中心地に位置しており、立地がとても良い。筆者が実習期間中に滞在していた学生寮もキャンパスの敷地内にあり、文学部までは徒歩で約20分、学内を走る無料バスでは約5分で行くことができる。この学内バスは運行状況を確認できるアプリもあり、非常に便利であった。

3. 実習内容

筆者の実習内容は大きく分けて、チュラーロンコーン大学の学部学生向けの授業、外部の社会人向け

日本語コース、日本語講座公式Facebookのコンテンツ制作であった。この他にも、課外学習や他大学のイベントへの参加の機会も得た。これについては、4章で詳述する。

3.1. 学部学生向け授業

①日本語副専攻学生向け会話授業

前期は、ユッパワン先生ご担当の日本語副専攻学生向けの授業に、TAとして参加した。教材は先生のオリジナル教材で、「勧誘—返答」「依頼—応答」などといった機能別で構成されている。授業の流れは以下の通りである。タイ語で導入がされた後、練習問題を行う。授業後、学習した内容のロールプレイ(以下、RP)を作成する課題が出され、学生は、次回授業までにスクリプトを提出する。次回授業の冒頭で課題のRPを発表し、それに対しフィードバック(以下、FB)を行うという流れである。筆者は、このうち、テキストにある練習問題、RPの場面作成、RPの添削およびFBを担当した。

毎回の授業の他に、中間・期末試験の問題作成や採点、口頭試験のロールプレイの相手役など、試験に関わるさまざまなことをさせていただいた。筆者にとってテストの作成や採点は初めての経験であったため、テスト作成時の注意点や採点基準の設定など、細かいところまで考えられていることに気づかされた。日本では学生側の立場でしか経験がない筆者にとって、このように教師側の立場を経験できたことは、とても貴重な経験であった。

基本的にはTAとして上述した内容を担当したが、筆者一人で授業を担当する機会も与えていただいた。普段はタイ語でのサポートがある中での授業であったため、日本語のみでの授業で学生にしっかりと伝わるか、学生がついてこられるか、不安も大きかったが、授業までに何度も先生とも打ち合わせをさせていただき、無事に終わることができた。

②日本語副専攻学生向けビジネスメール授業

後期は、ユッパワン先生ご担当の日本語副専攻の、オリジナルの教材で、敬語の確認から始まり、「お知

らせメール」「依頼メール」といったメールの機能別で構成されている。授業の流れは以下の通りである。タイ語での導入がされた後、練習問題を行い、学習した内容をもとにグループでメールを作成し、その場でFBを行う。授業後、ペアで行うメール作成課題が出され、学生は、次回授業までに課題を提出する。次回授業の冒頭で課題のFBを行った後、テスト実施という流れである。筆者は、このうち、テキストにある練習問題、授業時間内にグループで作成するメールとペアでのメール作成課題の添削、テストの採点、およびこれらのFBを担当した。テストの場面設定や採点についても、担当させていただいた。

ビジネスメールは、筆者の研究テーマであるため、実際の教育現場に教師としても携わることができ、筆者にとって非常に貴重な経験となった。はじめは、筆者のビジネスマンとしてのビジネスメールの経験が逆に邪魔をして、どこまでテクニックを教えられるのか、どこまで間違いを指摘すればいいのか、難しさを感じた。このようなことに悩んでいる時、先生にアドバイスをいただき、テクニックや微かなニュアンスではなく、受講している学生のレベルに合わせて、これまで書いたことがない日本語のメールが書けるようになるためにどのような指導をすればいいかという点をよく考えた。はじめはうまくできず、学生の反応もイマイチであったが、授業を重ねるごとに少しずつどのように教えられるか悩むことができた。そして、回を重ねるごとに学生がうまくメールを書けるようになっていくのを感じることができた。



写真1 日本語副専攻学生向けビジネスメール授業にて

3.2. 社会人向け日本語コース

東洋言語学科日本語講座が学外の社会人向けに開講している日本語のコースである。5月から8月初旬ごろ、9月から12月初旬ごろ、1月から4月初旬ごろの年3回に分けて開講されている。オンラインと対面で、平日夜と土曜日に開講されている。日本語のレベル別にいくつかのクラスがあり、筆者は其中で、『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』を教材として扱っている初級のクラスの会話ドリルを担当した。会話ドリルとは、タイ人の講師が文法導入の授業を何課分か実施した後、学習した課の復習のためのドリルである。1回の授業は90分、120分、180分と、その時々で異なる。分量も、2課分であったり、4課分であったりとさまざまである。基本的にはオンラインでの授業であったが、対面のクラスも4回ほど担当した。そのうち1回は、ご担当の先生の代行業をさせていただき、ドリルだけではなく、文型導入などの授業をする機会もいただけた。

受講している皆さんの年齢や職業、住んでいる場所は様々で、バラエティーに富んだ学習者の方々と接することができた。(日本に住んでいるという方もいらっしゃって驚いた。)クラスによって人数も雰囲気も異なり、元気なクラスもあればシャイなクラスもあった。どんなクラスでも、「日本人と日本語で話せた」という自信を少しでもつけてもらい、「日本語の勉強は楽しい」と思ってもらえるように工夫をした。実際に授業終了後に「楽しかった」と言ってくださった方もいて、うれしかった。

授業準備については、最初の慣れない頃には先生に何度も付き合っていたいただき、相談に乗っていただけたため、不安なく取り組むことができた。

3.3. Facebook コンテンツ (全18回) 制作

日本語の授業以外の主な活動として、日本語講座公式 Facebook に載せる日本語に関するコンテンツの制作を行なった。このコンテンツは月に2回のペースで投稿するシリーズであり、企画・立案から制作まで担当させていただいた。どのようなシリーズにするか、こういった媒体のコンテンツにするか、全何回にするかということも全て自分で決めて進めた。筆者は関西出身であるため、それを活かし、「え？なんて？KANSAIBEN」というシリーズ名の動画コンテンツを全18回分作成した。

これまで、自分でアイデアを出し、企画し、スケジュールに沿ってコンテンツを制作するという経験が

なかったため、最初は最後まで続けられるか不安であった。しかし、筆者の好きなようにさせていただきつつも、先生方が毎回チェックしてくださり、的確なコメントをくださったおかげで、最後まで楽しく取り組むことができた。動画のストックがなくなり締め切りに追われることも多々あったが、このシリーズをやりとげることができ、自信に繋がった。

3.4. その他授業等

①BCAC 学生向け日本語授業

チュラーロンコーン大学の HP によると、BCAC は Bachelor of Science in Applied Chemistry の略で、2005 年にできた国際プログラムの一つである。日本語講座の先生方は、「理学部のインターのクラス」と呼んでいらっしやった。

前期に、ここでの日本語の授業のうち 5 回参加し、授業内のドリルの約 20 分を担当させていただいた。使用教材は、『みんなの日本語初級 I』であり、ひらがな・カタカナからはじまる初級の学生向けの授業であった。授業は英語で進められていた。筆者は大学院入学後に日本語学校で非常勤講師をしてきたが、全て日本語で授業を行ってきたため、英語で行われる授業は初めての経験であり、新鮮であった。

②BALAC 学生向け日本語授業

チュラーロンコーン大学の HP によると、BALAC は The Bachelor of Arts Program in Language and Culture の略であり、2008 年にできたチュラーロンコーン大学を代表するグローバル・リベラル・アーツ・プログラムで、学部が運営している英語で教えるプログラムである。

前期に、ここでの日本語の授業のうち 2 回、ドリルの授業を行った。使用教材は、『みんなの日本語初級 I』であり、社会人向け日本語コースと同じ要領で進めた。授業は、基本的には直接法で行い、必要に応じて媒介語に英語を使用した。

後期は、チョムナード先生からドリルの動画を作成する機会をいただき、『みんなの日本語初級 I』の 11、12、13 課の会話ドリル動画を作成した。動画は、Zoom の画面録画機能で作成した。1 時間程度の動画であるため、飽きが来ないように様々な活動を取り入れ、視聴している学生が実際の授業に参加しているように感じられるように工夫をした。

4. 大学外での活動

①観光のための日本語の課外活動への参加

サランヤー先生のご好意で、観光のための日本語を受講している日本語専攻の学生の、アユタヤへの課外授業に、日本人観光客の役として参加させていただいた。授業で学んだことを一生懸命日本語で説明している学生の姿を見て、実際に観光地に赴いて応用練習をすることで、学生の意欲を向上させることができると感じた。



写真2 観光のための日本語の課外授業にて（アユタヤ）

②ランシット大学「ランシット祭り」の参加

高校生向けにランシット大学で開催された「ランシット祭り」にクイズコーナーの審査員の一人として参加させていただいた。イベントでは、参加している学生たちが日本の文化に関するクイズや歌などを披露したり、日本語を使って作品の紹介等をしていたりしていた。これらに取り組む姿を見て、日本語や日本に興味を持ってくれている学生がこんなにもたくさん海外にいるのだと感ずることができ、自分自身の日本語教育へのモチベーションを上げることができた。

5. おわりに

今回、日本語教育実習の機会をいただき、大学で教えるということを体験することができた。学生の立場では見ることができない、教師側の立場を見たり聞いたりすることは、今後の筆者自身のキャリアを描くために、とても貴重な機会となった。また、滞在中は日本人講師として現地で働いていらっしやる先生方にもお会いすることができ、現場での経験や苦勞をお聞きすることで、海外の大学で日本人講師として教えるということについてもイメージをすることができた。筆者よりもずっと日本語教育の経験

をお持ちのタイ人の先生方が、筆者のところへ日本語の質問に来てくださり、筆者の意見をしっかりと聞いてくださる姿勢には、先生方の向上心の高さを感じ、強く感銘を受けた。

最後に、実習を受け入れてくださりご指導くださったチューラーロンコーン大学のチョムナード先生、ユップワン先生に感謝申し上げます。魚介類にアレルギーがあり、満身にタイ料理が食べられない私をいつも気遣ってくださり、本当にありがとうございました。わずかな滞在期間中に二度もコロナにかかってしまい、コロナを含めて四度も高熱を出してしまった私を、温かく受け入れてくださり、本当に申し訳なく感じながらも感謝でいっぱいです。実習の内容についても、ユップワン先生には、研究室に授業前にアポ無しで突撃することも何度もありましたが、それでも「未来の日本語教師のためだから」と、いつも嫌な顔ひとつせず手を止めてアドバイスをくださり、とても感謝しております。また、パンラナンさんにはいつもお世話になりっぱなしでしたが、特にコロナになってしまった時に、たくさん差し入れをしてくださり、本当にありがとうございました。日本人講師として勤務されている渡邊先生にも、タイでの生活のノウハウなど、色々なことを教えていただきました。渡邊先生がいてくださって本当に心強かったです。ありがとうございました。このような機会を与えてくださった筒井先生をはじめとする大阪大学の先生方にも心より感謝申し上げます。

【参考 URL】

科学技術振興機構 HP <https://spap.jst.go.jp/resource/university/2090004.html> (最終閲覧：2025 年 1 月 12 日)

チューラーロンコーン大学 HP <https://www.chula.ac.th/en/> (最終閲覧：2025 年 1 月 12 日)

タイ・チェンマイ大学での日本語教育インターンシップ

田中 倫

1. はじめに

筆者は2023年7月から2024年2月にかけて、タイ北部チェンマイにあるチェンマイ大学人文学部日本語学科で日本語教育インターンシップに参加した。チェンマイは「タイの京都」とも呼ばれる美しい古都で、日本語学習者が多い地域でもある。

本インターンシップは、国際交流基金のご支援とチェンマイ大学のご協力によって実現したものであり、この場を借りてお世話になった皆様に改めて深く感謝の意を表したい。

2. 日本語学科

2024年2月末時点、チェンマイ大学で日本語を主専攻とする学生は約160名であった。1,2年生ではクラスごとに日本語の授業、3年生以降はより専門的な内容の選択授業が行われており、4年生はインターンシップまたは卒業論文を選択するという制度になっている。また、日本語を副専攻とする学生は約430名にのぼり、副専攻の学生向けの日本語初級の授業が開講されている。

3. インターン生としての活動概要

主にティーチングアシスタント（以下：TA）とし

ての授業補助と教壇実習（3.1）、スピーチ大会に向けての担当学生の指導（3.2）、インターン生主導のイベントの企画運営（3.3）、「学びキャンプ」の企画運営補助を行った（3.4）。

3.1 TA

TAとして授業に参加させていただいた主な科目は表1のとおりである。また、表外の科目においても、チャンスがあれば宿題の添削や中間・期末テストの評価をさせていただいた。

なお、表1の通り、大学は前後期制で（前期は6月中旬～10月末、後期は11月中旬～3月末）、1科目週2コマ制（月曜日と木曜日、火曜日と金曜日が同じ時間割）を取っており、全学休講の水曜日を日本語学科では文化活動（4.1）に充てている。

3.1.1 2年生・会話（前期・後期）

この授業は主専攻2年生約40名を対象に行われた。TAの主な役割は、教科書の会話練習パートの対話活動に参加し、日本語母語話者として学生の質問に答えることだった。学生から日本語や日本文化に関する質問を受ける一方、私もタイの興味深い情報を教えてもらうなど、双方向の学びを経験した。

前期	月	火	水	木	金
9:30~11:00		2年生・会話	文化活動		2年生・会話
11:00~12:30		副専攻4 (Section1)			副専攻4 (Section1)
13:00~14:30		3年生・会話			3年生・会話
14:30~16:00		副専攻4 (Section2)			副専攻4 (Section1)
後期	月	火	水	木	金
9:30~11:00	副専攻4 (Section1)		文化活動	副専攻4 (Section1)	
11:00~12:30	2年生・会話			2年生・会話	
13:00~14:30	副専攻2 (Section1)				副専攻2 (Section3)
14:30~16:00	副専攻2 (Section2)				副専攻2 (Section4)

表1) TAとして参加した科目

さらに、個人発表やグループ発表の評価とフィードバックも担当した。テストの得点以外で学生を評価するのは初めての経験で、採点基準の設定や学生に役立つコメントを作成する難しさを実感した。また、授業時間の一部または全部を借りて教壇実習をする機会も得た。教案作成時には学生の日本語力や授業進度を考慮したつもりだったが、実際に約40名の足並みをそろえる授業は大変難しかった。指示が上手く伝わらず逆に学生に助けられたり、授業進度が遅れ教案の調整を余儀なくされるなど、多くの課題を残した。実習後、個人差を生かし協調的な雰囲気を生むためのピアラーニングの導入が不足していたと気付いた。

学生たちは私の拙い授業にも積極的に授業に参加してくれて、心から有難く思った。その熱意に報いるべく、より良い授業を提供できる日本語教師を目指して努力を続けたい。



写真1) 2年生・会話（前期・後期）

3.1.2 3年生・会話（前期）

この授業は主専攻3年生8名で行われた選択授業で、教科書（自主制作教材）に基づいて、学生主体の対話活動を中心に展開された。3年生は日本語で自己表現が十分可能なレベルにあり、身近なテーマを具体的なデータや事例を用いて論理的に意見を主張することが目標だった。

TAとしての主な活動内容は、モデル会話の音読、発表例の作成、対話活動への参加、課題の添削、中間・期末テストの評価とフィードバックの提供である。また、授業時間の一部または全部を借りて教壇実習も行った。

TAの経験を通し、上級レベルに適した会話授業の進行や目標設定、教師として使うべき日本語のレベルについて実感を持って学ぶことができた。特に、少人数クラスでは教師が議論を先導せず、あくまで

司会役に徹する方が授業が円滑に進むというのは新たな発見であった。

例えば、「おすすめの作品を紹介する」というテーマでは、作品紹介例とデモテープを作成した。3年生には、初級レベルの概要説明を超え、内容を深めた情報を提供する指導が求められた。この過程で、私も指導法をメタ的に学ぶ機会を得た。また、学期最後の教壇実習では、『ワードウルフ』という推理ゲームを行った。3年生たちは巧みな日本語で相手を惑わしたり、論理的な推理を披露してくれて、3年生の実力が分かる面白いゲームとなった。



写真2) 3年生・会話（前期）

3.1.3 副専攻（前期・後期）

副専攻向けに開講される初級日本語の授業は、表1に示したようにレベル1から4に分かれている。私はTAとして2と4の授業に参加し、学生とのペアワーク、質問対応、宿題の添削、小テストや中間・期末テストの評価を担当した。また、授業時間の一部または全部を借りて教壇実習も行った。テストの評価を通して、私が担当した課の文法を学生たちが正しく使えるようになってきていることを確認できたことは、大きな達成感となった。



写真3) 副専攻2 Section4（後期）

3.2 スピーチ大会

スピーチ大会は日本語学科専攻 2 年生を対象に後期に開催され、各教師が学生のスピーチ指導を分担する。私も 7 名を指導した。

大変興味深かったのは、スピーチの経験有無により原稿の構成能力に差が見られた点と、内容の要領を得ない原稿には段落内の内容の統一性と段落間の結束性が欠如しているという発見だった。また、発音やイントネーションの指導では、個々の発話に注目することで全体授業では見落としがちな学生の癖を発見した。例えば、ある学生は文法能力が高く普段は誤りを指摘されにくいのが、よく聞くと「日本語」という言葉のアクセントが平板ではなく中高型になる独特の癖を持っていた。

大会後学生たちは自信を得て、会話の授業(3.1.1)でも発言や発表が前期の授業より堂々としたものになっており、スピーチ大会の効果を実感した。そして、やはり指導した学生が大会で入賞したことは、自分のことのように嬉しかった。



写真4) スピーチ大会 表彰式

3.3 高校生との交流会

インターン生主導の企画で、日本語学科 2 年生と埼玉県の高校(恩師の勤務校)のオンライン交流会を企画・実施した。この交流会の目的は、大学生がさまざまな立場の人々と多様な話題で日本語を使い交流する機会を提供することである。

交流会は 2 日間に分けて行われ、1 日目はアイスブレイキング、2 日目は「大学進学必要性」「進学において障害となること」「校則の必要性」「日本とタイの関係」という 4 つのテーマについてグループディスカッションを実施した。参加者は事前学習を行い、日本やタイの事情を整理して臨んだ。

交流会後、学生たちは「ディスカッションの時間が短く、テーマも難しかった」と大変そうに感想を

述べる一方、「もっと上手く話せるようになりたい」と学習動機を強めていた。今後このような場を設ける機会があれば、参加者の負担をより軽減する工夫を心がけたいと思う。



写真5) オンライン交流会の様子

3.4 学びキャンプ

「学びキャンプ」は、北部タイ日本語日本研究コンソーシアムの支援を受け、日本語学科で毎年 2 回行われるイベントである。テーマに沿ったディスカッションとアクティビティを通じて、任意の参加者が多角的に学べる場を提供しており、第 1 回は「ジェンダーとセクシャリティの多様性」、第 2 回は「SNS との付き合い方を考えよう」をテーマとした。私は担当の先生のご指導のもと、企画から運営まで携わり、事業意図の策定や予算管理、参加者の調整などを経験した。外部予算を頂いて行うような正式なプロジェクトを運営するのは初めての経験で、学びと自信を得ることができた。



写真6) 第1回「学びキャンプ」ポスター 筆者作

4. 学生との交流

インターンシップ中は授業以外でも学生たちとの交流を大切にするよう心掛けた。紙幅の都合で割愛するが、授業後に学生たちと一緒に夕食を取ったり、休日にチェンマイを案内してもらった時間はかけがえのない思い出だ。以下に述べるのは、学生たちと共に参加したチェンマイ大学や日本語学科が主催で行われた企画についてである。

4.1 文化活動

授業がない水曜に行われる文化活動では、華道、書道、茶道、かるた、折り紙部があり、学外の日本の方が講師をされている。私は書道、茶道、かるたに1～2回、華道に5回参加したが、いずれも初心者だったため、初歩から丁寧に教えていただき大変ありがたかった。学生たちは熱心に取り組み、特にカルタ部は積極的に大会に参加していた。タイの競技カルタ人口は多く、全国大会には初心者から経験者まで各県の代表が集まると聞き、日本文化の浸透に驚かされた。



写真7) 文化活動 華道

4.2 クンドイ (登山)

チェンマイ大学では全学部の新入生を対象に「クンドイ」と呼ばれる通過儀礼が行われる。この伝統行事は1964年の大学設立以来続いており、学部1年生が隊列を組んでドイステープ山頂のワット・プラタート寺院まで約12 kmを歩いて登るというものだ。私も日本語学科の1年生と共に、1か月前から行われる体力づくりや筋力トレーニングから参加して本番を迎えた。ワット・プラタート寺院は観光地として有名だが、学生たちと励ましあいながら自力で登頂したことは特別な思い出となった。



写真8) ドイステープ山を登る隊列

4.3 ロイクラトン祭りのパレード

ロイクラトン祭りは、タイ全土で行われる伝統的な灯籠流しの祭りである。特にチェンマイで行われるものが有名で、祭りの夜には旧市街を山車が練り歩くパレードが開催される。在チェンマイ日本領事館も山車を出し、チェンマイ大学日本語学科からは有志が手伝いに参加した。私も学生たちと共に手伝いに加わる機会をいただき、世界的に有名なこの祭りを初めて体験した。多くの人々に賑わう沿道の中央を歩けるとは思ってもおらず、大変貴重で楽しい経験となった。



写真9) 領事館の山車とチェンマイ大学学生

4.4 日本祭

日本祭は、日本語学科の学生が主体となって開催する文化祭で、日本食の屋台、浴衣の着付け体験、神社風インスタレーションなどが企画・運営された。学生たちは外部講師の指導を受けながら、日本食のレシピを調査したり、浴衣の着付けを練習したりと、

熱心に準備を進めていた。また、ステージではバンド演奏やコスプレショーが行われ、私も学生に誘われてバンドにベースとして参加した。本番に向け、授業後に学生たちと毎晩練習を重ねたことは非常に楽しく、友情を深めることができたと思う。



写真 10) バンド演奏

5. おわりに

渡航前、私はこれから始まるインターンシップに対してポジティブな印象を抱いていたが、初めての場所で自分がどう役に立てるのか、周囲とどう関係を作れるのかという点は全く予想がつかず緊張していた。しかし、実際に滞在してみると、私は新しい場所に赴き、知らないことを知り、自分に求められていることを探しながら環境に適応していく過程を心から楽しむことができる自分に気が付いた。もちろんそれは私自身の努力ではなく、いつも新しいことに挑戦するよう促してくださり、温かい雰囲気ですその場に私がいることを許してくださった先生方や、私の TA としての経験を尊重しつつ友人としても付き合い合ってくれた学生たちのおかげである。8 か月間は本当にあっという間だった。

日本語教育という側面でまとめると、大学で教える教師の奥深さと視野の広さを学んだインターンシップだった。私は渡航前に既に教育実習や日本語学校非常勤としての経験があったが、高等教育機関で中上級以上の学生に関わるのは初めだった。そのため、授業準備や指導を通じて中上級者への効果的な教授法を学ぶよう心掛け、自身の日本語教育におけるアイデアの引き出しを増やすことができた。また、先生方や学生との交流を通して、それぞれの教育観や目標に触れ、学生のニーズを的確に捉えて力を伸ばせるようサポートすることの重要性を実感した。加えて、学生の進路支援や来客対応といった学科運営に関する業務を間近で学ぶ機会があったことは、

普段自分が学生として過ごす大学ではありえない事なので、貴重な機会となった。

チェンマイでの生活という側面では、本当に楽しかったの一言に尽きる。日常生活や学生たちとの交流を通してタイ語やタイの文化について学ぶ機会も多く、徐々にタイの生活が自分に馴染む感覚は忘れがたい。同時に、日本語や日本文化を教える立場として、双方向の学びがある嬉しさと豊かさを感じると共に、これからも学習者の言語や文化を学び続ける姿勢を忘れないでいようと改めて襟を正した。

本インターンシップを通じて得た経験を活かし、将来は良い日本語教師になれるよう努め、願わくば海外の大学で働いたり、日本語を通じた人と人のつながりを支援する仕事をしていきたいと考える。今回の経験を支えてくださった全ての方々には、心より感謝申し上げたい。

日本語実習・日本語演習 2024年度の概要

永原 順子

1. 「日本語」専攻語科目について

大阪大学外国語学部では、日本語を専攻語とする留学生（特別聴講学生を含む）を対象に、表1に挙げている14科目の「日本語」専攻語科目を開講している。1年次に5科目（10単位）、2年次に5科目（10単位）、

3・4年次の2年の間に計4科目（8単位）が必修である。1・2年次の科目は通年、3・4年次の科目は半期の授業である。各授業は1回90分で、週1回（通年は30回、半期は15回）行われている。

表1 2024年度「日本語」専攻語科目 科目名・内容

1年次（実習）		2年次（実習）		3・4年次（演習）	
日本語1	文章作法 アカデミックライティング	日本語11	ビジネス日本語 アカデミック日本語	日本語Ⅰa	日本語アカデミックライティング・スピーキング
日本語2	論文作成・講読	日本語12	日本語類義語分析	日本語Ⅰb	論文読解・要約作成
日本語3	時事日本語 日本語の発音	日本語13	論文講読 （日本文化）	日本語Ⅱa	日本語の副詞
日本語4	講読・批評理論	日本語14	日本語作文 （日本事情）	日本語Ⅱb	国語教育
日本語5	総合・文法	日本語15	論文講読 日本語の文法教育		

2. 「日本語」専攻語科目の概要

「日本語」専攻語科目の目標は次の3点である。

- ① 日本社会の様々な場面において、適切な言語行動を理解し、身につける。
- ② 日本語および日本文化、社会に関する理解と分析力を養い、自らの問題意識を高め、課題遂行のための方策や情報を見いだす力をつける。

- ③ 日本の文化、社会を理解するだけでなく、自己の母文化と比較対照し、分析的に考えた上で、それを的確に相手に伝えることができる。CEFRに準拠した1・2年次の到達度目標の詳細は表2の通りである。なお、3・4年次の到達目標はC1～C2レベル相当である。

表2 「日本語」専攻語科目 1 年次・2 年次の到達度目標

日本語		1 年次	2 年次
CEFR		B2 ～C1 レベル相当	C1 レベル相当
理解すること	聞くこと	<ul style="list-style-type: none">・自分がある程度知っている内容についての大学の講義を辞書などの補助を使って理解できる。・テレビニュースがおおよそ理解できる。	<ul style="list-style-type: none">・初めて聞く内容の講義でもおおよそ理解することができる。
	読むこと	<ul style="list-style-type: none">・大学の講義で使われる教科書、参考書、参考文献、新聞記事や一般的な雑誌、インターネットなどの記事を辞書を使いながらであれば読むことができる。	<ul style="list-style-type: none">・レポートを書くのに必要な専門書、論文などを辞書をひかなくてもおおよそ理解することができる。
表出	話すこと	<ul style="list-style-type: none">・場面に応じた丁寧さで母語話者と会話ができる。・授業中に自分の意見をわかりやすく述べることができる。	<ul style="list-style-type: none">・場面と話し相手を考慮して適切な会話ができる。・授業中に他の学生の意見を踏まえながら自分の意見を述べて議論できる。
	表現	<ul style="list-style-type: none">・ハンドアウトを使いながら、自分のよくわかっている内容について口頭発表ができる。	<ul style="list-style-type: none">・ハンドアウトなどを効果的に使いながら、わかりやすい口頭表現ができる。
	書くこと	<ul style="list-style-type: none">・口頭発表のためのハンドアウトが作れる。・あるテーマについて、自分の意見をレポート形式で書くことができる。・フォーマルな手紙が書ける。・履歴書が書ける。	<ul style="list-style-type: none">・口頭発表のためのハンドアウトを、文章、図表、写真などを効果的に用いながら作ることができる。・レポートで文献などを効果的に引用しながら的確な文体で書くことができる。

3. 2024年度の受講生

表3に、2024年度の「日本語」専攻語科目の受講者数と出身地を示す。なお、休学中等の学生も含め

た。特別聴講学生数は（内数）で示し、すべて1年次として換算した。

表3 2024年度の受講者数と出身地

* 括弧内は特別聴講学生（内数）。

学年	タイ王国	トルコ共和国	ベトナム社会主義共和国	ミャンマー連邦共和国	香港	台湾	大韓民国	中華人民共和国	総計
1	1(1)	1		1		1	3	8(2)	15(3)
2			1		1	1		6	9
3						2	1	9	12
4							1	6	7
総計	1(1)	1	1	1	1	4	5	29(2)	43(3)

以上、2024年度の日本語実習・日本語演習の概要を述べた。

【参考資料】

大阪大学外国語学部（2024）『学生便覧2024』

2024 年度（春夏学期） 日本語 1 実践報告

六城 雅章

1. はじめに

本稿は、2024 年度（春夏学期）の「日本語 1」の実践報告である。この授業の受講者は 12 名であり、出身地別にみると、中国 6 名・韓国 3 名・台湾 1 名・ミャンマー 1 名・トルコ 1 名である。

2. 授業の概要

2.1 授業の目的・学習目標・成績評価

この授業の目的は、「レポートや論文を作成するために、日本語の文章作法を修得する」ことである。

また、この授業の学習目標は、次の 2 つである。

- （1）日本語の文章作法に則った文章を書くことができる。
- （2）学術的なレポートを論文の体裁で論理立てて書くことができる。

そして、この授業の成績は、学習目標の（1）を小テスト（35%）と問題演習（15%）とによって評価し、（2）を期末レポート（50%）によって評価した。なお、期末レポートの内容は、日本語の動詞の分類について論じよというものであった。

2.2 教科書・参考図書など

教科書は指定せず、自作のプリントを配付した。

参考図書については、『増補版 大人のための国語ゼミ』を指定した。この授業全体の構成（3 節で述べる）は、本書の内容を参考にしたところがある。

その他、『日本語パラグラフ・ライティング入門：読み手を迷わせないための書く技術』などの書籍を紹介したり、論文のコピーを配付したりした。

3. 各回の授業内容

各回の授業内容は、表 1 のとおりである。

表 1 各回の授業内容

回	授業内容
1	・日程・内容・成績評価の説明 ・受講者自己紹介
2	・小テスト／解説 ・「見た目を整える」方法の概説

	・問題演習／解説
3	・小テスト／解説 ・「場面・相手に合わせる」方法の概説（1） ・問題演習／解説
4	・小テスト／解説 ・「場面・相手に合わせる」方法の概説（2） ・問題演習／解説
5	・小テスト／解説 ・「抽象化する・具体化する」方法の概説 ・問題演習／解説
6	・小テスト／解説 ・「列挙する」方法の概説（1） ・問題演習／解説
7	・小テスト／解説 ・「列挙する」方法の概説（2） ・問題演習／解説
8	・小テスト／解説 ・「関係を明らかにする」方法の概説 ・問題演習／解説
9	・小テスト／解説 ・「事実と意見を区別する」方法の概説 ・問題演習／解説
10	・小テスト／解説 ・「反論する」方法の概説 ・問題演習／解説
11	・小テスト／解説 ・「根拠を示す」方法の概説 ・問題演習／解説
12	・小テスト／解説 ・「引用する／出典を示す」方法の概説 ・問題演習／解説
13	・小テスト／解説 ・「パラグラフ・ライティングで書く」方法の概説 ・問題演習／解説
14	・小テスト／解説 ・「レポート・論文を作成する」方法の概説 ・問題演習／解説
15	・小テスト／解説 ・授業全体の総括 ・受講者間でのレポートの添削

3.1 第1回の授業内容

第1回の授業では、オリエンテーションおよび自己紹介を行なった。また、授業全体の概説として、レポートや論文は、単に「自分の伝えたいことを書く」のではなく「読み手に読んでもらえるように、読み手に伝わるように、読み手に納得してもらえるように書く」べきであることを説明した。

3.2 第2～14回の授業内容

第2～14回の授業は、次のような構成で行なった。

- ・【小テスト／解説】(約20分)

授業の冒頭10分間で小テストを実施し、直後にその解説を行なった。

- ・【概説】【問題演習／解説】(約70分)

日本語の文章作法について概説した(各回の内容は表1を参照)のち、授業の最後に、授業内容に沿った問題を受講者に解かせた。また、問題演習については、受講者全員が解答を終えたことを確認したうえで、その解説を行なった。

授業内で【小テスト／解説】【問題演習／解説】を実施したのは、授業内容の積極的な復習を受講者に促すためである。なお、【小テスト／解説】【概説】【問題演習／解説】について、受講者から質問があった場合には、可能なかぎりその場で回答し、その場での回答が困難なものは次回の授業時に回答した。

3.3 第15回の授業内容

第15回の授業は、それまでの集大成となるものであり、その中心は「受講者間でのレポートの添削」(以下、「添削」とする)である。これは、各受講者が自分なりにレポートを一旦完成させたうえで、それを教室に持参し、受講者間でレポートを交換して、互いのレポートの添削を行なう、というものである。なお、この「添削」を実施するにあたっては、授業内で次のような周知活動を行なった。

- ・第1回の授業で、第15回の授業時に「添削」を実施する旨を受講者に伝える。
- ・適宜「添削」の存在に触れる。
- ・第14回の授業で、第15回の授業時にレポートを持参するよう受講者に伝える。

文章作法の授業に「添削」を取り入れることには、少なくとも次の4つの利点があると思われる。

- (1)「読み手に読んでもらえるように、読み手に伝わるように、読み手に納得してもらえるように書く」ことが自然に実践される。なぜならば、「自分なりに一旦完成させたレポート」は、他の受講者に熟読されることを意識して書かれるからである。
- (2) 授業内容の総復習が自然に実践される。なぜならば、他者のレポートを添削するためには、自身がそれまでの授業内容を理解していなければならないからである。
- (3) 他者の文章を読むことで、自分の中にはない発想や表現を学ぶことができる。
- (4) 他者からの指摘によって、自分では気付かなかった問題点に気付くことができる。

そして、「添削」の成果を利用して必要な修正を施したものを、最終的な期末レポートとして提出させた。

なお、第15回の授業の構成は、冒頭で第2～14回と同様の【小テスト／解説】を実施したのちに授業全体の総括を行ない、残った時間のすべてを「添削」に費やす、という形をとった。

4. 今後の課題

以上、2024年度(春夏学期)の「日本語1」について述べた。最後に、15回の授業を終えて明らかになった課題について述べておきたい。

今後の課題として挙げられるのは、期末レポートの内容の見直しである。先述のとおり、この授業の期末レポートの内容は、日本語の動詞の分類について論じよというものであった。これは先行研究の調査を要するものであり、そのような内容を設定したのは、引用の方法や参考文献の記載法などを確実に身につけさせるためであった。だが、「添削」の際、相手のレポートで言及されている先行研究の記述を理解するのに時間がかかり、思うように作業が進んでいない組があった。今後は、受講者に必要以上の負担をかけることがないよう、レポートの内容の見直しを行ないたい。

【参考文献】

- 野矢茂樹(2018)『増補版 大人のための国語ゼミ』筑摩書房
- 松浦年男・田村早苗(2022)『日本語パラグラフ・ライティング入門：読み手を迷わせないための書く技術』研究社

2024 年度（通年） 日本語 2 実践報告

サンジャヤ ソンダ

1. 授業の概要と目的

本稿は、2024 年度の日本語 2 の授業実践の報告である。日本語 2 は春夏学期と秋冬学期に分かれている。春夏学期は基本的なアカデミックリーディングに関する教科書や様々な記事、調査結果、論文をメイン教材とし、外国人日本語学習者から見た日本語、日本の社会・文化、日本語教育に関わる問題を中心に扱った。読んだ内容に関する自分の意見や考えを他者に合理的に分かりやすく伝えるといった、アカデミックリーディング及びクリティカルシンキングの能力を身につけることを到達目標とした。秋冬学期は、学習者が興味を持つ新聞記事や論文についての発表やディスカッションを行った。

2. 学習目標

- ① アカデミックリテラシーに関心を持つ
- ② アカデミックリテラシーの大切さへの意識を高める
- ③ アカデミックリーディングを理解し、能力を高める
- ④ クリティカルシンキングの能力を高める

3. 教材選択について

春夏学期の前半は、『改訂版大学・大学院留学生の日本語①読解編』という教科書を使用した。後半は、グループを決め、グループで日本語学、日本語教育、日本社会文化のうち関係のある 1 つの新聞記事又は調査結果を探し、要約したものを発表してもらった。

秋冬学期は、ペアを決め、ペアで日本語学、日本語教育、日本社会文化のうち関係のある 2 つの論文を選択し、要約したものを発表してもらった。

4. 授業の進め方

4.1 春夏学期の授業について

【授業の進め方】春夏学期の前半は、『改訂版大学・大学院留学生の日本語①読解編』を使用した。毎週この教科書の課を 2 つ分扱った。教科書に従って文章を読んだ後、練習をした。最後に、授業当日

にクラスで読んだ文章や習ったことに関する意見や感想を CLE に書かせた。春夏学期の後半では、グループを決め、グループで日本語学、日本語教育、日本社会文化のうち、それらの分野に関係があって受講生の興味のある新聞記事又は調査結果を探し、まとめたものを発表してもらった。発表後は、ディスカッションをした。ディスカッションでは、グループ発表後に質疑応答を行った。時間があつた場合は、発表した新聞記事又は調査結果についてのコメントや感想を CLE に書いた後、ディスカッションする形式で授業を進めた。

【毎週の課題】使用教科書にある文章や習ったこと、発表した新聞記事又は調査結果に関して、コメントや感想を CLE に送る。(14 回程度)

【学期末課題】個々の受講生が授業の後半で発表した内容について、自分の意見や感想を学期末エッセイとして提出。

4.2 秋冬学期の授業について

【授業の進め方】秋冬学期は、ペアを作り、ペアで日本語学、日本語教育、日本社会文化のうち、それらの分野に関係のある 2 つの論文を探し、発表した後、ディスカッションを行うというような流れで授業を実施した。選択する論文は 2 つあるが、2 つは異なる分野の論文に決めなければならないことにした。1 回目の発表は前半の授業で、2 回目の発表は後半の授業で行なった。発表では選択した論文を要約したものを発表した後、質疑応答をするという流れで行った。その後、発表した論文について意見や感想を CLE に書いた後、受講生みんなが口頭で述べる機会を設けた。

【毎週の課題】発表した論文に関してコメントや感想を CLE に送る。(14 回程度)

【学期末課題】個々の受講生がペアで発表した内容(2 つ)について自分の意見や感想を学期末エッセイとして提出。

表1 授業で扱ったテーマ

回	内容
1	オリエンテーション (春・夏学期)
2	①構造：文章の構造 段落内の構造 ②構造：中心文 支持文
3	①構造：アウトライン 論理の構造分類 ②構造：定義
4	①構造：経過 ②構造：比較・対照
5	①構造：原因・結果 ②構造：位置
6	①構造：列挙・順序 ②構造：理由・根拠
7	構造：筆者の意見を表す表現
8	講師による発表 ①新聞記事・調査結果・データを読む ②ディスカッション・発表
9	グループ発表1 ①新聞記事・調査結果・データを読む ②ディスカッション・発表
10	グループ発表2 ①新聞記事・調査結果・データを読む ②ディスカッション・発表
11	グループ発表3 ①新聞記事・調査結果・データを読む ②ディスカッション・発表
12	グループ発表4 ①新聞記事・調査結果・データを読む ②ディスカッション・発表
13	グループ発表5 ①新聞記事・調査結果・データを読む ②ディスカッション・発表
14	グループ発表6 ①新聞記事・調査結果・データを読む ②ディスカッション・発表
15	学期末エッセイ提出
16	オリエンテーション (秋・冬学期)
17	講師の発表 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
18	グループ発表1 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
19	グループ発表2 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表

20	グループ発表3 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
21	グループ発表4 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
22	グループ発表5 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
23	グループ発表6 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
24	グループ発表1 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
25	グループ発表2 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
26	グループ発表3 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
27	グループ発表4 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
28	グループ発表5 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
29	グループ発表6 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
30	学期末エッセイ提出

5. 受講生の反応と今後の課題

今年度の受講生は、中国語母語話者が7名、韓国語母語話者が3名、トルコ語母語話者が1名、ビルマ語母語話者が1名の合計12名であった。

春夏学期の前半では、教科書に沿って、文章の構造、文章の読み方などを学んだ。文章の内容も理解しやすいものから複雑なものを読んで、受講生は文

章の内容だけでなく、自国の文化から観た意見も述べていた。

春夏学期のグループ発表では、個々のグループが選んだ新聞記事やある調査結果について発表することになっていたが、ほとんど全てのグループが論文や論文にあるデータについて発表していた。全てのグループが発表の準備もきちんとされていた。また、日本語学・日本語教育・日本社会文化に関する論文又は論文にあるデータで、受講者が発表に選んだ論文のテーマはどれも興味深いものであった上に、本授業の計画の内容より難いものであったが、全てのグループがわかりやすく面白く発表することができた。発表後は、挙手し、質問したり意見を述べたりする学生もいれば、CLE に意見や感想を記入した後、ディスカッションの時間に発表のフィードバックをする学生もいた。このように、受講生は皆、春夏学期の授業の全てを積極的に受けていた。

秋冬学期の授業では、一学期中に、ペアで日本語学・日本語教育・日本社会文化に関する論文に関して発表する形で授業を実施した。各ペアが2回発表し、1 回目の発表は秋冬学期の前半で、2 回目の発表は秋冬学期の後半で行った。受講生が選択した論文は、日本語母語話者の若者の言葉や外国にルーツを持つ人への日本語教育の支援、アニメのキャラを使用することによる地域の活性化といった日本語学、日本語教育、日本社会文化に関する様々な興味深い論文を発表していた。どのペアも準備がきちんとされており、わかりやすく発表することができた。秋冬学期にも、発表後に、挙手し、質問したり意見を述べたりする学生もいれば、CLE に意見や感想を記入した後、ディスカッションの時間に発表のフィードバックをする学生もいた。

春夏学期と秋冬学期の授業のプロセスを全体的に見ると、受講生は皆、自分の考えや意見などを述べたり、受講生間で意見の対立があったとしても良い態度をとったり、大変積極的に受けていた。

今後、本授業の受講生が日本語学、日本語教育、日本社会文化の様々な論文の内容の理解力を高めることだけではなく、それらに関する論文講読により興味を持ち、クリティカルシンキングの能力の向上に役立つことを期待する。

【参考文献】

- アカデミック・ジャパニーズ研究会 (2018) 『改訂版大学・大学院留学生の日本語①読解編』アルク
- 阿藤誠 (2017) 「少子化問題を考える一少子化の人口学的メカニズムを踏まえつつ」『医療と社会』27(1), pp. 5-20
- 関崎博紀 (2016) 「接触場面初対面会話における話題スキーマー日本の大学における留学生と日本人学生の会話からの示唆」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』31, pp. 17-32

2024 年度（通年） 日本語 4（講読） 実践報告

宮崎 玲子

1. はじめに

本稿では、2024 年度の「日本語 4（講読）」について報告する。授業の目標は、1 年次の外国語学部専攻語到達目標¹を参考に、以下の 3 つを設定した。

1. 主張と論法が明確な文章を論理に従って読み、著者の主張を説明することができる。
2. 読解した内容について、自分の知識や体験と照らし合わせて他の受講生と議論することができる。
3. 読解した内容をもとに、更なる具体例を考えたり著者の主張を発展させながら、自分の意見を記述することができる。

異なった文化背景を持つ学生が混在する教室で読解の授業を進めて行くにあたって、他者の視点や意見を取り入れることは、非常に有効である。そのため、本授業ではペアやグループでのワークに重点を置き、他の学生との対話を通して自分の読みや考えを深めること、またテキストを読んで新しい知識を得るだけでなく、そこから新たな視点に気がついたり応用したりすることを目指した。

2. 授業概要

2.1 使用教材

使用教材には、学生の専攻に鑑みて日本語・日本文化・日本事情に関連するもので、かつどの学生にも比較的身近なことばや社会を取り扱ったもの、自分自身の母語や母文化と比較したり、他の学生との対話が深められるものを筆者が選定した。メイン教材として以下の 3 点を採用し、適宜抜粋して使用した。本稿では、以下それぞれ教材①、教材②のように示す。

①古田徹也（2021）『いつもの言葉を哲学する』朝日新聞出版

②三木那由他（2022）『会話を哲学する』光文社

③中村桃子（2024）『ことばが変われば社会が変わる』筑摩書房

また、小説を読みたいという学生も一定数いたため、前期には以下の小説を用い、ジグソー・リーディングⁱⁱの手法を取り入れながら、読解を行った。

④梶尾真治（2008）「きみがいた時間、ぼくの行く

時間」『クロノス・ジョウンターの伝説∞インフィニティ』朝日新聞社

その他、時事問題を扱いたい学生も多く、速読の練習として、以下の教材や新聞の社説を取り扱った。

⑤朝日新聞出版（2024）『朝日キーワード 2025』朝日新聞出版

2.2 授業概要

授業の概要は以下の通りである。前期と後期では内容が異なるため、分けて報告する。

2.2.1 前期

授業の概要と取り扱った教材・トピックを表 1 に示す。

表 1 授業概要（前期）

回	授業内容とトピック
1	オリエンテーション
2	教材①-1 第 1 章第 1 節 グループワーク ・理不尽なルールについて 教材⑤「止まらない物価上昇」
3	教材①-1 第 1 章第 1 節 発展ワーク ・要約のポイント 教材⑤「ひきこもり、全国に 146 万人」
4	教材①-2 第 1 章第 5 節 グループワーク ・オノマトペのイメージについて 教材⑤「準備難航する大阪・関西万博」 『子ども家庭庁』スタート
5	教材①-2 第 1 章第 5 節 発展ワーク ・オノマトペを楽しもう 教材⑤「広がる対話型 AI の活用」 「海外でヒット相次ぐ日本アニメ
6	教材①-3 第 2 章第 1 節 グループワーク ・レポートや論文の執筆について 教材⑤「深刻化する教員不足」 「増える公立大」
7	教材①-3 第 2 章第 1 節 発展ワーク ・課題やレポートの提出の仕方について 教材⑤「広がる書店空白地帯」 「ステマ規制スタート」
8	教材④-1 ジグソー・リーディング

9	教材④-2 ジグソー・リーディング
10	教材④-3 ジグソー・リーディング
11	教材①-4 第4章第6節 グループワーク ・新聞の見出しについて 教材⑤「最低賃金、1千円超え」 「リスキリング促進と労働市場改革」
12	教材①-4 第4章第6節 発展ワーク ・新聞の見出しをつけてみよう 教材⑤「復活するインバウンド需要」 「物流 2024 年問題」
13	教材①-5 第3章第3節 グループワーク ・ことばの使われ方を調査してみよう 教材⑤「技能実習制度廃止へ」 「深刻な人手不足」
14	教材①-5 第3章第3節 発展ワーク ・コーパスを使ってみよう 教材⑤「地球沸騰の時代」「GX推進法」
15	総括・授業評価アンケート

各回の授業は、以下のように進化した。なお、第8回～第10回の授業は変則的な回だったため、ここでは触れない。

- 一. 最近読んだもの、報告
- 二. サバイバル読み

【一週目】

- 三-1. 予習シートのグループ確認
- 四-1. 全体共有
- 五-1. 応用ワーク

※課題として、読解部分の要約とコメント提出

【二週目】

- 三-2. 要約課題のまとめや発展ワーク
- 四-2. 全体共有
- 五-2. 次回の読解内容に関するプレ・ワーク
- 六. 速読

一. に関しては、学生の授業以外の読解を促すために、ウォーミングアップを兼ねて行った。読むものは言語もジャンルも問わないこととし、口頭で報告してもらった。毎回数名、基本的に挙手制とした。日本の近代の名著を読んだことを報告する学生もいれば、現代のミステリー作品、哲学書など学生によって報告するジャンルは様々で、学生の趣味嗜好を

窺い知る機会にもなった。

二. に関しては、まず、学生全員を起立させ、その日のメイン教材（教材①）の読解部分を、一人一行ずつ順番に音読するものである。ただし、読んでいる人が間違えてしまったら座するというルールで行った。大学生になると、授業で音読する機会は少なくなることが予想されるが、良い文章を声に出して読むことは、本文の理解や文章力の向上のためにも効果があるとされる。また、語句の読みの予習を促すことにもつながるため、この活動を取り入れた。

三～五. は、メイン教材である教材①の読解活動である。予習として、前の回に配布した読解資料を筆者が自作した予習シート（当該範囲の要約補助となる設問への回答）に沿って読んできていることを前提として行った。毎回くじ引きでグループを決め、そのグループでの活動となる。一週目には、予習シートへの回答をグループで確認し、それを全体で共有した。その後、読解内容をより確実にするため、応用ワークとして、自分自身で例を考えて共有したり、読解内容に関して議論したりするグループ活動を行った。また、読解範囲の要約とコメントの記述を課題とした。二週目には、各自が提出した要約課題に関してフィードバックを行った後、発展ワークとして、読解内容に関連する内容についてのグループワークを行った。最後に、次回の読解範囲に関して、補足説明が必要だと思われる箇所を取り上げ、プレ・ワークとして説明したり、考えたりする時間を設けた（五-2.）。学生たちの日本語能力は総じて高いが、日本で生まれ育った日本語母語話者であれば自然に身につけているであろう語彙や、日本に長く生活していれば耳にしているであろう日本事情などが不足している場合がある。そのような知識の提供の場としたり、トピックに関連したことを取り上げ、当該トピックへの興味を持たせることを目的とした。

六. に関しては、時間の関係で実施できない日もあったが、教材⑤のうち、事前に聞いた学生の興味のあるトピックや比較的どの学生にも身近な内容のトピックを筆者が取り上げた。最初の二回は全員同じトピックのものを時間を決めて読み（筆者自作の要約補助シート使用）、その後、ペアになって読んだ内容を相手に要約して話すという活動を行った。三回目以降は、2種類のトピックを準備し、ペアで異なるものを読み、その後、読んだ内容を相手に要約し

て説明するという活動に変えた。こうすることで、「要約して分かりやすく話す」という活動の真正性がより高くなり、また触れるトピックの数も多くなることを狙った。

2.2.2 後期

授業の概要と取り扱った教材・トピックを表2に示す。

表2 授業概要（後期）

回	授業内容とトピック
16	オリエンテーション ・参考文献の検索の仕方など
17	教材③-1 第1章-1 グループワーク 教材⑤「闇バイト、広域連続強盗」「自転車交通違反厳罰化と電動キックボード」
18	教材③-2 第1章-2 グループワーク 教材⑤「政府のデジタル化推進」 「マイナンバー制度の拡充と混乱」
19	教材③-3 第1章-3 グループワーク 教材⑤「LGBT理解推進法」 「異次元の少子化対策」
20	教材③-4 第1章-4 グループワーク 社説比較「LGBT理解推進法」
21	教材③-5 第6章 グループワーク 社説比較「出生率低下」
22	社説比較 ・グループで興味のあるテーマの社説を選んで比較しよう
23	教材④-1 はじめに グループワーク 教材⑤「見通し立たないリニア開業時期」 「スペースジェット開発撤退」
24	教材④-2 第5章-1 グループワーク 社説比較「リニア工事」
25	教材④-3 第5章-2 グループワーク
26	教材④-4 第1章-1 グループワーク
27	教材④-5 第1章-2 グループワーク
28	教材④-6 第3章-1 グループワーク
29	教材④-7 第3章-2 グループワーク
30	総括・授業評価アンケート

前期の最終週に行ったアンケートや毎回の授業のコメントシートを受けて、また後期はさらに多くの読解教材を取り上げたいと思い、後期では、以下の

ように授業内容、進行を変更した。下線部が主な変更点である。なお、第22回の授業は変則的な回だったため、ここでは触れない。

- 一. 最近読んだり聞いたり知ったこと、報告
- 二. サバイバル読み
- 三. メイン教材の読みに関するグループワーク
- 四. 全体共有
- 五. 次回の読解内容に関するプレ・ワーク
- 六. 速読（教材⑤または新聞の社説比較）

ここでは、主に下線部について報告する。

一. に関しては、「読んだもの」に限定すると、その週になかなか興味深いものに出会えず報告できないとの意見があったため、テレビやネットニュースなどで見たものや聞いたものなど幅を広げることとした。他の授業の課題で読んだ本について報告する学生もいれば、日本や自国、世界の時事ニュースを取り上げる学生もいた。

三. に関しては、前期は二週で1つの文章を取り上げていたが、後期は毎週1つの文章を取り上げることにした。前期と同様、筆者が自作した予習シートに沿って読解資料を読んできていることを前提としたが、予習シートには、読解内容の確認だけではなく、自分自身で考える項目も取り入れた。また、授業内のグループワークでは、予習シートの確認をすると同時に、読解内容について理解を深めたり例を挙げたり、また、議論する問いも設けるようにした。

六. に関しては、前期と同様、教材⑤を取り上げながら、その内容に関する2社の社説を取り上げ、ペアで比較する活動も行った。

3. 学生の反応と今後の課題

ここからは、主に後期の授業評価アンケートの結果に基づいて学生からの反応と今後の課題について述べる。

「最近読んだり聞いたり知ったこと、報告」については、「みんなが最近知ったことや読んだことをシェアすることで、自分もいろいろなことを学ぶことができた」「報告するために何かしら読まないといけなかったので、本を読むようになって良い」「会話力の上昇に役立つ」など読書の習慣づけやインプットだけでなくアウトプット力の向上、そして、クラスメイトのことを知ること、クラスメイトの報告からの学

びも多かったことが窺えた。また、前期の「読んだこと」報告から幅を広げたことも、後期は特に課題に追われていた学生にとって活動に参加しやすくなった旨の意見も複数あった。読書の習慣づけや興味の幅を広げるためだけでなく、お互いのことを知るためにも、このような活動は今後も続けていきたい。

「サバイバル読み」に関しては、「文章を分析する前に、立って読むことによって、内容への理解が深まる」「話す練習になった」「読むことで自分のものにすることがある」など、活動の意義を理解して参加していることが窺えた。一方で、「自分一人だけが座るようになったら、ちょっと恥ずかしくて悔しい気持ちになる」という間違えたときのフォローの大切さを再認識するコメントもあった。「間違えると恥ずかしい、悔しい」という経験は事前学習を促す効果もあれば、授業への積極的な参加を妨げる原因にもなってしまう。この活動は、元は筆者の娘の小学校の国語授業で人気のあった活動を模範にしたものである。小学生は、他の児童の音読をよく聞き、誰かがつまったり間違えたりしたときに活発に指摘し合ったり、また、自分が最後まで残ったことに誇りを感じたりとゲーム性を楽しんでいるとのことであった。一方、この活動を成人の日本語非母語話者（主にアジア圏出身）の授業に取り入れたところ、他の学生の間違いを指摘するように指示しておいても、指摘する学生はおらず、むしろ読めない場合には助け合うという姿が見られた。実際、「クラスメイトの日本語を正すのは気まずいのであんまり出来なかった」というコメントもあり、指摘しやすい環境ではなかったことが窺える。今後は、個々の学生の文化的背景や気質を考慮しつつ、クラスの雰囲気づくりにも留意しながら、最適な方法を模索する必要がある。

次に、メイン教材のグループワークについては、「他の授業では離れている席の学生と話せる機会が減多になく、この授業でのグループ・ペアワークはクラスみんなについて分かり合える大切な時間だった」「毎週異なるクラスメイトと組むことで、面白いし、いろいろな意見を聞けるので、とても良い」

など、全員から好意的な反応、コメントが寄せられた。ただし、「グループ分けするとき、予習しなかった人、意見など何も言わない人と一緒になると、ちょっとやる気がなくなる」といった教室コントロールの不足に言及する意見もあった。筆者自身、予習をしてこない数名の学生には手を焼いていた。今年度、予習は授業中の口頭とスライドでの指示のみで、提出の義務や成績に反映させることもしなかった。しかし、グループワーク中に読み進める、クラスメイトの予習シートを覗く、授業中にネットや生成AIなどを活用して参加する学生も見受けられた。今後は、予習の効果や必要性をさらに周知し、何かしらの予習を促す仕掛けを取り入れるようにしたい。また、グループワークの介入の仕方についても、今後の課題としたい。

速読に関しては、「日本社会の多様な主題について触れることができるので勉強になった」「読解力の上昇に役立つ。社説比較は他人とのコミュニケーション能力だけでなく、ある物事を細部まで細かく観察する力の育成にも役立つと思う」など肯定的に受け止める意見が多かったが、もともと時事問題にあまり興味のない学生にとっては難しい内容だったようだ。また、特に、非漢字圏の学生にとっては制限時間内に読むことが難しいようで、十分に時間を取った上で速い学生には追加の課題を与えるなどの工夫が必要であると感じられた。

筆者は、今年度初めて本授業を担当することとなった。コースの開始時点で授業全体を俯瞰して準備するには至らず、学生たちを戸惑わせることも多かったが、終始活発に授業に参加してくれた学生たちには深く感謝したい。ここには報告しきれない反省点も多々あるが、今後の改善点として、次年度の指導に生かしていきたい。

【参考文献】

- 館岡洋子（2005）『ひとりで読むことからピア・リーディングへ』東海大学出版
- 班目貴陽（2023）「2022年度通年日本語4（講読）実践報告」『日本語講座年報2021-2022』pp. 47-49

ⁱ <https://www.sfs.osaka-u.ac.jp/user/kyoumu/ns/st.html>

ⁱⁱ グループのメンバー全員が異なるテキストを読

み、お互いの読んだ内容を話し合いの過程でつなぎ合わせて1つのストーリーを作り出していく読解活動のこと。

六城 雅章

1. はじめに

本稿は、2024 年度（春夏学期）の「日本語 5」の実践報告である。この授業の受講者は 12 名であり、出身地別にみると、中国 6 名・韓国 3 名・台湾 1 名・ミャンマー 1 名・トルコ 1 名である。

人と子どものあそびの教科書『世界のじゃんけん』などである。

3. 各回の授業内容

各回の授業内容は、表 1 のとおりである。

2. 授業の概要

2.1 授業の目的・学習目標・成績評価

この授業の目的は、「日本語のより高度な理解・運用のために、日本語の感動詞の使い分けや発音などを修得する」ことである。

また、この授業の学習目標は、次の 2 つである。

- (1) 感動詞を、適切に使い分け、発音することができる。
- (2) 実際の使用例から、その感動詞の意味や使用者などを説明できる。

そして、この授業の成績は、学習目標の (1) を毎回の授業で求める実演への取り組み方 (30%) によって評価し、(2) を期末レポート (70%) によって評価した。なお、期末レポートの内容は、授業で扱った感動詞の中から 1 語を選び、その実例を収集して分析せよというものであった。

2.2 教科書・参考図書など

教科書は指定せず、自作のプリントを配付した。このプリントは、日本語の感動詞の使い分け・発音・意味・使用者などの網羅的・体系的な理解を目指して、筆者のこれまでの研究成果——稿末の六城 (2015-2022) ——の内容を再整理しつつ、実例や発音の詳細などの情報を追加したものである。

参考図書については、『現代感動詞用法辞典』を指定した。これは、現代日本語の感動詞に特化して編集された辞典であり、その使用者や発音などの情報を詳細に記述したものである。

その他、感動詞周辺の語類、およびこれをめぐる文化的背景などを紹介する目的で、さまざまな書籍を教室に持参し、受講者に回覧させた。一例を挙げると、『日本俗語大辞典』『罵詈雑言辞典』『県別 罵詈雑言辞典』『伝承遊び考 4 じゃんけん遊び考』『大

表 1 各回の授業内容

回	授業内容
1	・ 日程・内容・成績評価の説明 ・ 受講者自己紹介
2	・ 前回の振り返り ・ 「感動詞」概説
3	・ 前回の振り返り ・ 「呼掛」を表す感動詞の概説と実演 (1)
4	・ 前回の振り返り ・ 「呼掛」を表す感動詞の概説と実演 (2)
5	・ 前回の振り返り ・ 「ほめあげ・あざけり」を表す感動詞の概説と実演
6	・ 前回の振り返り ・ 「行動制御」を表す感動詞の概説と実演
7	・ 前回の振り返り ・ 「応答」を表す感動詞の概説と実演 (1)
8	・ 前回の振り返り ・ 「応答」を表す感動詞の概説と実演 (2)
9	・ 前回の振り返り ・ 「応答」を表す感動詞の概説と実演 (3)
10	・ 前回の振り返り ・ 「掛声」を表す感動詞の概説と実演 (1)
11	・ 前回の振り返り ・ 「掛声」を表す感動詞の概説と実演 (2)
12	・ 前回の振り返り ・ 「感動」を表す感動詞の概説と実演 (1)
13	・ 前回の振り返り ・ 「感動」を表す感動詞の概説と実演 (2)
14	・ 前回の振り返り ・ 「感動」を表す感動詞の概説と実演 (3)
15	・ 前回の振り返り ・ 授業全体の総括

3.1 第1回の授業内容

第1回の授業では、オリエンテーションおよび自己紹介を行なった。また、次の2点を目的として、簡単なテスト（と、その解説）を実施した。

- （1）筆者が、現時点での受講者全員の理解度・到達度を把握するため。
- （2）各受講者が、現時点での自身の理解度・到達度を把握するため。

なお、このテストの結果は、この授業の成績評価には一切かわらない。また、このテストは、そのことを受講者に説明したうえで実施した。

テストの内容は、10分間で次のような選択式の問題を13問解く、というものである（ちなみに、この設問の解答は④であり、各選択肢を選んだ人数は、①が1名、②が2名、③が2名、④が7名であった）。

空欄に入る語として最も適切なものを①～④の中から選び、記号で答えなさい。

（女子高校生が、テストで満点を取った友達を褒める場面）_____、天才高校生。

- ①さあ ②はい ③やっ ④よっ

テストの結果は次のとおりであり、受講者間の理解度・到達度の差が確認される形となった。

- ・13問正解……3名
- ・12問正解……3名
- ・11問正解……3名
- ・10問正解……1名
- ・9問正解……2名

また、この結果を受けて、筆者は、次の2点を意識した授業運営を心掛けた。1点目は、自明とも思われる基本的なことがらについても可能なかぎり省略せずに説明する、というものである。これは、理解度・到達度が（受講者全体の中で）低い者を意識したものである。2点目は、時間に余裕があるときには周辺のことがらを積極的に扱う、というものである。これは、理解度・到達度が（受講者全体の中で）高い者を意識したものである。

3.2 第2回の授業内容

第2回の授業は、次のような構成で行なった。

- ・【前回の振り返り】（約20分）

前回提出分のコメントシートに記載された質問などに対して、筆者の見解を示した。その

際、受講者に発言を求めたり受講者間での議論を促したりした。

- ・【「感動詞」概説】（約70分）

第3回以降の授業内容を理解するための準備として、「感動詞」の概説を行なった。

【前回の振り返り】については第3～14回の授業内容とともに3.3節で述べることにし、ここでは、【「感動詞」概説】について（一言であるが）述べる。

第2回の授業では、【「感動詞」概説】として、『言語学大辞典 第6巻 術語編』の「間投詞」の項の記述を引用しつつ、次の8点について説明した。

- （1）国文法における位置づけ
- （2）人間の「行為」との関連性
- （3）語形の特徴
- （4）表記の特徴
- （5）文の構造
- （6）現場依存性と多義性
- （7）属性や待遇関係との関連性
- （8）表現効果

3.3 第3～14回の授業内容

第3～14回の授業は、次のような構成で行なった。

- ・【前回の振り返り】（約20分）

前回提出分のコメントシートに記載された質問などに対して、筆者の見解を示した。その際、受講者に発言を求めたり受講者間での議論を促したりした。

- ・【概説と実演】（約70分）

感動詞の使い分け・発音・意味・使用者などについて概説した（各回の内容は表1を参照）。その際、その回で扱った感動詞を、一つ一つ受講者に発音させた。また、適宜、受講者に発言を求めたり議論を促したりした。

【前回の振り返り】に比較的多くの時間を割いたのは、「理解できなかったことがあっても、くりかえし説明を受けることができる」「授業で扱っていないことがらについて疑問を抱いた場合、それを解消することができる」ということを受講者に理解してもらい、授業への積極的な参加を促すためである。

そして、この構成で授業を運営した結果、この授業に新たな側面が加わることとなった。受講者が積極的に授業に参加するようになったため、回が進むにつれて、受講者の自発的な発言や議論が増加していった。また、それに伴い、「自分の母語にも同様の

感動詞が存在する」「自分の母語にも似た言い方があるが、細部が異なっている」といった情報が多く集まるようになった。すなわち、「日本語の学習」のみを目的としていたこの授業に、「日本語と他言語との対照」の側面が加わることとなったのである。

3.4 第15回の授業内容

第15回の授業では、第2～14回と同様の「前回の振り返り」を実施したのち、授業全体の総括を行なった。また、時間に余裕があったため、舌打ち行為や挨拶表現などについても扱った。

4. 受講者の反応

この授業に対する受講者の反応は、筆者の想像よりも良かった。参考までに、コメントシートの記述の一部を匿名で抜粋し、次に示しておく。

- ・最初のテストがとてもおもしろかったと思います！
- ・15回の授業を通して、様々な感動詞について学べて興味深かったです。
- ・なんとなく聞いたことがあったり、知っていた感動詞について、使い方や具体的な意味などを知ることができ、よかった。
- ・感動詞について専門的なことを学べたのはよかったです。これから身の周りの感動詞にもっと気をつけられると思います。
- ・授業のテーマ以外にも、自分の興味分野や他の国の言語などにも触れることができ、色々と楽しく勉強できる時間でした。

5. 今後の課題

以上、2024年度（春夏学期）の「日本語5」について述べた。最後に、15回の授業を終えて明らかになった課題について述べておきたい。

今後の課題として挙げられるのは、受講者間における発言回数の差の改善である。先に触れたように、この授業においては、受講者による発言が次第に増加していった。これ自体は喜ばしいことである。だがその一方で、全回を通してみた場合に、各受講者の発言回数に明らかな差がみられたことも事実である。もちろん、これにはさまざまな原因が考えられる——たとえば、各受講者の性格（人前で発言することに対する心理的な抵抗の有無や程度差）・各受講者の興味（授業内容に対する興味の有無や程度差）

など——。また、強引に回数を揃えればよいというものでもないであろう。とはいえ、発言回数の差を小さくすること自体は可能であったように思われる。今後は、より教室全体を意識した授業運営を心掛け、改善に努めたい。

【参考文献】

- 浅田秀子（2017）『現代感動詞用法辞典』東京堂出版
奥山益朗〔編〕（1996）『罵詈雑言辞典』東京堂出版
加古里子（2008）『伝承遊び考4 じゃんけん遊び考』小峰書店
亀井孝・河野六郎・千野栄一〔編著〕（1996）「間投詞」（『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂、pp. 249-252）
真田信治・友定賢治〔編〕（2011）『県別 罵詈雑言辞典』東京堂出版
田中ひろし〔著〕・こどもくらぶ〔編〕（2002）『大人と子どものあそびの教科書 世界のじゃんけん』今人舎
米川明彦〔編〕（2003）『日本俗語大辞典』東京堂出版
六城雅章（2015）「名詞による呼掛について——喚体論の視点から——」『日本文藝研究』67-1、関西学院大学日本文学会、pp. 59-78
六城雅章（2016）「呼掛詞による呼掛について」『日本文藝研究』67-2/68-1、関西学院大学日本文学会、pp. 71-86
六城雅章（2017）「掛声について」『日本文藝研究』69-1、関西学院大学日本文学会、pp. 103-123
六城雅章（2018）「応答詞による応答について——呼掛に対する応答の場合——」『日本文藝研究』70-1、関西学院大学日本文学会、pp. 49-72
六城雅章（2020）「感動詞「おら」の機能について」『日本文藝研究』71-2、関西学院大学日本文学会、pp. 127-148
六城雅章（2021a）「感動詞による感動について」『日本文藝研究』72-2、関西学院大学日本文学会、pp. 199-220
六城雅章（2021b）「疑問文に対する応答について——応答詞による応答の論——」『日本文藝研究』73-1、関西学院大学日本文学会、pp. 131-153
六城雅章（2022）「呼掛文・挨拶文・ほめあげ文・嘲り文について」『日本文藝研究』74-1、関西学院大学日本文学会、pp. 61-84

2024 年度（秋冬学期） 日本語 5（文法） 実践報告

荒島 和子

1. はじめに

本稿では、2024 年度秋冬学期の「日本語 5」について報告する。この授業は 1 年生の学部留学生が受講する授業であり、受講生は 10 名で出身別には中国、韓国、台湾、ミャンマー、トルコであった。

このクラスでは「方言」や「若者ことば」など身近な話題について分析し、なぜそのような現象が起こるのか、自ら考える力を身につけながら日本語の特徴を知ることを目とした。学生同士のディスカッションやグループ・ワークを取り入れ、他の学生との対話を通して自分の考えを深めたり、新たな視点に気が付いたりできるようになることを目指した。

学習目標は以下の三点である。

- ①日本語の仕組みを多角的視点から分析することができる。
- ②自分の考えを他の学生にわかりやすく論理的に伝えることができる。
- ③他の学生との議論を通して、自分の考えを発展させることができる。

2. 授業の概要

テキストとして、野田尚史・野田春美（2017）『日本語を分析するためのレッスン』を使用した。このテキストは「大学や短大の初年次教育科目や言語関係の基礎科目のテキストとして、アクティブ・ラーニングを行いやすいように作ったもの（p.vi）」であり、グループワークを想定して作成されている。全部で 15 のレッスンがあり、各レッスンにはそれぞれ 4 つの問題が設定されている。例えば「若者ことば」のレッスンでは、問題 1 は「略して使う若者ことば」、問題 2 は「程度が高いことを表すことば」、問題 3 は「あいまいにぼかす若者ことば」、問題 4 は「「ちがう」の若者ことば」といった具合である。各レッスンの扉の部分には導入として具体的な文例や会話例があり、そのレッスンでどのような問題を扱うのかがわかりやすく紹介されている。そして、各問題にも具体的な例が提示され、「どのような現象が起こっているのか」というシンプルな問いから「なぜそのような現象が起こるのか」「同じような他の例を挙げ

てみる」といった深いレベルの問いまで様々に設定されている。また、各問題には「考えるときのヒント」も設けられており、問題を読むだけではわかりにくい部分も、ヒントを読むことによって答えを導き出せるように工夫されている。さらに、各レッスンの最後のページには「課題」が 3 つずつあり、宿題やレポートの課題として活用できるようになっており、筆者も期末レポートとしてこの課題を利用した。

先にも述べたように、このテキストは初年次教育や言語関係の基礎科目のテキストとして作られたものであり、留学生の日本語科目のために作られたわけではない。そのため、日本語母語話者ではない留学生にとっては難しいと思われるトピックや馴染みがないトピック、例えば早口ことばや回文を扱う「ことば遊び」や「しりと」といったトピックも含まれている。しかし、逆に言えば、日本語学習者としての視点を生かした分析ができることも期待できる。また、学生たちは大学に入学してからまだ半年で、各分野の概論的知識しか持っていないことから、専門分野を決め卒業論文のテーマを考える際の一つの参考資料となるよう、できるだけ幅広いテーマを扱いたいと考えた。そして、今後の専門的な学習・研究に役立つような分析力を養い、多角的な視点を持つことが必要であるという考えから、このテキストを選択した。

3. 授業の進め方

初回の授業では問題の解き方、考え方を理解するために、クラス全体でレッスン 1 の問題 1、2 に取り組んだ。コース前半はグループでの分析とし、3～4 人のグループごとに各問題について考え、グループでまとめた解答をクラス全体で共有し、ディスカッションするという流れで進めた。コース後半は学生の個人発表とし、レッスンの中から各自興味のあるレッスンの問題を 1 つ選んで担当者を決めた。担当学生は学術的な文献を調べて根拠を挙げることであり、自分の考えや調べたことを単に発表するだけでなく、他の学生に議論を促し、授業を主導する

形で進めることとした。担当者によっては同じレッスンの中の複数の問題をまとめて担当することもあった。

授業の内容と扱ったトピックは表 1 の通りである。

表 1 授業内容とトピック

回	授業内容	トピック
1	ガイダンス 全体での分析	授業の説明、自己紹介 L1 しりとり
2	グループでの分析①	L1 しりとり
3	グループでの分析②	L2 ことばの意味
4	グループでの分析③	L2 ことばの意味
5	グループでの分析④	L2 ことばの意味 L8 話しことばと書き ことば
6	グループでの分析⑤	L8 話しことばと書き ことば
7	グループでの分析⑥	L10 カタカナ
8	グループでの分析⑦	L10 カタカナ L13 丁寧体と普通体
9	学生による発表①	L3 若者ことば L5 会話の失敗
10	学生による発表②	L5 会話の失敗
11	学生による発表③	L7 ことば遊び L9 あいまい文
12	学生による発表④	L11 マンガのことば
13	学生による発表⑤	L12 方言 L14 漫才のことば
14	学生による発表⑥ グループでの分析⑧	L4 和語・漢語・外来語
15	グループでの分析⑨ 総括 授業評価アンケート	L4 和語・漢語・外来語

レッスン 1 と 2 は全体での分析とグループでの分析で扱うことを事前に決めていた。それ以外のグループでの分析で扱ったレッスンは、4 回目の授業で発表の担当者を決めた際に、誰も選ばなかったレッスンから選んだ。筆者がこのテキストを使って授業をするのは初めてではないが、学生が興味を持つレッスンは一様ではない。今年度のクラスでは、過去のクラスで選ばれることが少なかった「会話の失敗」や「ことば遊び」を選択した学生がおり、各レッス

ンが比較的満遍なく選ばれた印象である。

4. 学生の反応と今後の課題

ここからは授業評価アンケートの結果に基づいて学生からの反応と今後の課題について述べる。

まず、この授業を受けて理解が深まったことを尋ねた質問では、「日本語について考えること、普段気にしたことのないことを探求すること」「日本語の面白いポイントが学べました」「日本語の様々な法則性について知ることができました」という意見が見られた。テキストの前書きに書いてある、「無意識に使っている日本語の奥にひそむ法則性を見つけ出してほしい (p.v)」という狙いは、ある程度達成できたのではないだろうか。次に、この授業を受けてさらに興味を持つようになったことを尋ねたところ、「漢語と和語の使い分け」「言葉のニュアンス、意味の範囲」「方言」「漫才」「若者ことば」など、学生によって回答が様々で、各学生の興味の幅が広がったことが窺えた。

グループでのディスカッションについては概ね好評であった。「コース後半の発表よりもディスカッションしたほうがもっと頭に内容が入る」という意見や、「ディスカッションの時間を増やしてほしい」という意見が見られた。学生による発表では、自分の考えや調べたことを単に発表するだけではなく、他の学生に議論を促すことを目指したが、深い議論にまで発展させることができなかったように思う。また「教科書に執着しすぎた気がする」という意見があったことから、今後はテキストの問題からさらに発展させた問題についても考える機会を増やし、より深い学びにつなげ、学習意欲を高められるように改善していきたい。

【テキスト】

野田尚史・野田春美 (2017) 『日本語を分析するレッスン 〈アクティブ・ラーニング対応〉』大修館書店

2024 年度（春夏学期） 日本語 15 実践報告

谷口（井手） 恭子

1. はじめに

本稿は、2024 度春夏学期の授業「日本語 15」の実践報告である。受講生は2年生の学部留学生9名で、出身別には中国 7 名、香港 1 名、ベトナム 1 名であった。

この授業では、質問等を通して論文を批判的に読む力を養い、卒業論文執筆及び将来の基礎となるような知識を身につけるとともに、知識を基に考察し、考えを整理することを目的とし、論文講読を行った。

成績評価は、授業への参加度、発表、論文講読の「論文まとめシート」、論文講読の発展活動により、総合的に判定した。

2. 授業の概要

授業の概要は表 1 の通りである。学習目標を①新聞記事や研究論文などを批判的に読むことができる、②日本語教育など各自の専門分野に必要な知識を増やすことができる、③日本語の高度な語彙表現を用いて、知識や考察が表せる、の 3 点とし、これに沿って授業を組み立てた。

2 回目は論文講読への足掛かりとして、質問に注目した授業を行った。3 回目以降は論文講読を行った。

表 1 授業概要

回	授業内容
1	イントロダクション
2	質問力トレーニング
3	論文講読（筆者が選んだ論文）
4-12	論文講読（受講生が選んだ論文）
13	論文講読の発展活動
14	論文講読の発展活動、春夏学期の振り返り

3. 授業の内容

ここでは、論文講読への足掛かりとして行った 2 回目の授業と、3～12 回目の授業内容を具体的に紹介していく。

3.1 2 回目：質問力トレーニング

論文講読には、批判的思考力を以て読み、質問や議論を通して理解を深め、考えを整理することが必要だと考える。その一助として、2 回目の授業で OPI（Oral Proficiency Interview）の手法を援用した質問力トレーニングを行った。OPI とは、ACTFL（American Council on the Teaching of Foreign Languages：全米外国語教育協会）が開発したテストと被験者が 1 対 1 で行う会話能力テスト（山内 2005、p. 2）のことである。OPI では、被験者の会話能力測定のために質問の難易度を徐々に上げていくが、それには質問形式だけではなく質問内容の難易度も上げなければならない。質問内容の難易度を上げるには、その話題に関する多くの知識、話題を多方面から見る能力や批判的思考力が必要であるため、質問力に注目した活動は授業の学習目標に合っていると考えた。授業では、実際の OPI¹を例示し、「スポーツ」という話題について、好きなスポーツは何かという個人的な質問から、進学の際のスポーツ推薦の制度の是非という社会的な質問への質問形式・内容の難易度の変化を見せた。スポーツ推薦の制度の是非に関する質問で、テストは被験者に意見を求め、その上で反駁していたが、被験者の意見の根拠の不明確な点を指摘することや、被験者と異なる視点や立場から意見を述べることは、批判的思考力を養う一つの方法として適していると言えるだろう。そこで授業では、受講生にもスポーツ推薦の制度の是非について意見を求め、筆者や他の受講生が反駁を行い、さらに仮定的な状況を設定した上でどのような質問ができるかを考えた。受講生は学生の立場として意見を述べていたが、スポーツ推薦の学生を受け入れる学校側から、またはスポーツ推薦の制度の社会的意義などに関する意見や質問がないことを筆者が指摘すると、受講生にハッとした表情が浮かんだ。この活動を通して、ある話題を多方面から見るという経験ができたのではないだろうか。

その他には、2025 年に開催される大阪・関西万博の新聞記事¹¹を数種類用いて、ペアで意見交換や、質問・反駁を行う活動を行った。新聞記事は、万博開

催に肯定的なものも否定的なものもあったが、それらの理由を踏まえながらも、多様な観点からの質問を促したところ、歴史的、経済的、文化的、社会的といった幅広い観点からの質問がなされた。

3.2 3～12 回目：論文講読

3～12 回目の授業では論文講読を行った。3 回目は筆者が選んだ論文講読を行ったが、論文は大学の授業支援システム（以下、CLE）にて事前に配布し、授業当日には発表レジュメを用意した。筆者は、近年ニュースや新聞などでも取り上げられることが増え、認知度が高まっている「やさしい日本語」をテーマとした論文を選んだ。受講生が持つ「やさしい日本語」に対するイメージや知識はそれぞれであったが、この論文における「やさしい日本語」の定義や論点等を理解し、記述内容に関するディスカッションを行った。筆者が選んだ論文は、論文の目的以外にも記述内容が多岐に渡っており、論文講読の初回に教員（筆者）が扱う論文としては適切ではない面もあったと反省している。しかしながら、受講生は論文の良い点及び疑問点や問題点についても指摘し、積極的に意見交換を行った。また、筆者からの「発展課題」として、受講生の出身地における「やさしい〇〇語」の存在や普及の状況について「論文まとめシート」に書いてもらうこととした。

4～12 回目は、発表担当の受講生が興味のある論文を探し、発表レジュメを作成し、発表した。発表の際は、少なくとも発表の 1 週間前には論文を CLE にて共有すること、発表レジュメは発表までに CLE にて共有することを求めた。また、論文は、査読付きの「学会誌」「研究会誌」に掲載された研究論文、実践報告、調査報告から選ぶこととした。査読付きの「学会誌」「研究会誌」の例としては、『日本語教育』、『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』、『異文化間教育』などを紹介した。発表担当以外の受講生には、事前に論文を読んでおくことを課題とし、授業後には論文の要約、コメント、疑問点・批判、クラスにおけるディスカッション及び自分の意見、今回の論文を起点に考えた発展課題を記すための「論文まとめシート」の提出を課した。この「論文まとめシート」は予習の際にも、コメントや疑問点を書き込むために用いることができる。

この授業の目標の 2 つ目は「日本語教育など各自の専門分野に必要な知識を増やすことができる」で

あるが、筆者は、受講生が 2 年生であり、この段階では専門的な学びに限らず、様々な学問分野から幅広く学ぶことにも意義があると考え、論文の分野は指定しないこととした。その結果、受講生が選んだ論文は日本語教育学、日本語学、認知言語学、日本文化学、死生学など、多様な分野からのものであった。

発表担当の受講生は、自分が作成したレジュメを用いながら、その論文を選んだ理由、論文の概要、コメントや疑問・批判等を発表した。他の受講生もコメントや質問を行うことで、発表者にとっても新たな気づきがあり、全体として論文への理解が深まっていったようであった。授業では 9 名の受講生が順番に論文講読をしていったわけであるが、回数を経るにつれ、論文の理解をより深く導く工夫が見られるようになった。例えば、発表論文の理解の肝となる先行研究の一部も紹介する、発表論文で引用されている参考文献に当たり概要を紹介する、発表論文での多くの図をホワイトボードにわかりやすく図示する、発表論文において使用された研究方法に関する追加情報を伝える、などの工夫である。

また、発表を聞く受講生も、論文講読の能力が上がっている様子が見て取れた。筆者が顕著に感じたことをいくつか挙げる。まず、論文の論理の一貫性により注意を払うようになったことである。その論文の中心的テーマではない文章の細部を問うことに時間を費やさなくなった。次に、データの見方が慎重になったことである。データが表す事象を見る際に、データに現われていない事象についても時代背景等を含めて議論・考察を行うことができた。それから、研究方法、調査方法に関する学びもあった。具体的には、「ライフ・ストーリー」のような質的研究のいくつかの手法について知識を得、受講生の今後の研究に具体性がもたらされたことである。

4. 受講生の反応と今後の課題

最後に、受講生の反応と今後の課題について述べる。この授業は通年授業であるため、春夏学期が終了した時点では大学からの授業評価アンケートが行われない。そこで、筆者は Google Forms で簡易アンケートを作成し、受講生にアンケートへの協力を依頼した。質問項目は、①授業は授業目標の達成を踏まえて行われていたと思うか、②授業の目標以外にどのようなことを学びたいか、③その他自由記述、

の3項目とした。全受講生から回答を得ることはできなかったが、得られた回答の内容を記す。質問項目①については、授業は授業目標の達成を踏まえて行われていたという評価を得た。論文講読と「論文まとめシート」への記入を繰り返すことにより批判的読解を行う練習が積み、口頭でも記述でも高度な日本語力を用いて考察を行う機会となったのではないと思う。質問項目②については、「具体的な研究方法の立て方を学びたい」という回答があった。秋冬学期の授業では研究計画を作成する授業もあることから、この授業で得た知識を是非実際に活かしてほしいと思う。質問項目③では、「論文講読の流れにおける「発展課題」という考え方を初めて知り、経験したが今後役に立つ」、「他の受講生の関心があるテーマを知り興味深かった」、「他の受講生の意見を知った上で、再思考ができた」、「他の受講生の質問の仕方から観察できるものがあつた」という記述があつた。論文講読への取り組み方がより能動的になり、ピア・ラーニングを通して、受講生が新たな知識を得たり、自らの思考を問い直すことができたことは、筆者にとっても大変嬉しいことである。一方、予習・復習に用いた「論文まとめシート」には「要約文の字数指定があつたらよかった」という記述もあつた。確かに論文の要約方法や字数は受講生によって差があつたため、負担感の公平さの担保のた

めにも、ある程度の指示は必要だったと思われる。次回は指示の方法を考えたい。また、日本語専攻の分野ではない論文を読むことに否定的な記述もあつた。どの論文を授業で扱うべきか、受講生の意見も聞きながら再考する必要があるだろう。今後は課題の指示といった実務面にも注意し、実のある授業となるよう考えていきたい。

【参考文献】

- 庵功雄他 (2019)『〈やさしい日本語〉と多文化共生』
ココ出版
- 庵功雄編 (2022)『「日本人の日本語」を考える：ブ
レイン・ランゲージをめぐる』 丸善出版
- 伊藤奈賀子他 (2023)『ピア活動で身につけるアカデ
ミック・スキル入門』 有斐閣
- 桜井厚 (2002)『インタビューの社会学—ライフス
トーリーの聞き方』 せりか書房
- 桜井厚・小林多寿子 (2005)『ライフストーリー・イ
ンタビュー 質的研究入門』 せりか書房
- 山内博之 (2005)『OPI の考え方に基づいた日本語教
授法—話す能力を高めるために—』 ひつじ書房
- 八木真奈美他 (2021)『質的言語教育研究を考えよう
リフレクシブに他者と自己を理解するために』
ひつじ書房

ⁱ 日本語 OPI 研究会「OPI を授業に生かす第3回」
<https://www.opi.jp> (最終閲覧日 2025 年 1 月 30
日)

ⁱⁱ 例えば、毎日新聞 (2024 年 3 月 9 日)「海外館建
設 輪をかけて困難に? 万博 400 日前、立ち上がる
『壁』」など

2024 年度（秋冬学期） 日本語 15 実践報告

金谷 由美子

1. 授業の概要と目的

本稿は、2024 年度秋学期の日本語 15 の授業実践の報告である。日本語 15 では、日本語文法とその教え方に関する比較的読みやすいテキスト（庵 2017、2018）を通して、①受講者が日本語文法や日本語教育に対する知識を深め、自らの目標言語である日本語に対する探求心を持つこと、②受講者が自らの日本語学習者としての経験を生かしつつ、文法教育のあり方を検討・議論することを通して、能動的かつ批判的に論文を読むことを学ぶことを目的とした。

2. 学習目標

- ①日本語学の基本的な用語を理解し、日本語について言語学的な視点から書かれた論文が読める。
- ②日本語の文法について考察・議論ができる。
- ③自らの日本語学習を振り返り、今後の日本語研究や日本語学習に役立てることができる。
- ④日本語教育や日本語研究に対する関心を深める。
- ⑤自分の考察をまとめて小論を書くことができる。
- ⑥自分で研究テーマを探ることができる。

3. 教材選択について

庵（2017）『一歩進んだ日本語文法の教え方 1』くろしお出版と庵（2018）『一歩進んだ日本語文法の教え方 2』くろしお出版の 2 冊を選択した。

これらのテキストを選んだ理由の一つとして、庵氏がこの 2 冊のテキストで目指しているものが学習者の「母語の知識を活かした日本語教育」であることを挙げたい。庵氏の言う「母語の知識を活かした日本語教育」というのは、第二言語習得における母語の影響を前提に、学習者の母語に関する知見を教育者が共有することによって、学習者にとって難しい部分とそうでない部分を把握し、効率的な説明や教授法を考案することを目指すものである。

庵（2017）は、中間言語（Selinker 1972）という考え方を認めながらも、母語の転移による誤用や非用（そして正用）が第二言語習得において存在することは、まぎれもない事実であるとし、日本語教育においても積極的に学習者の母語に対する理解を深

めることを後押ししている。母語の影響だけですべてが説明できるわけではないが、学習者の母語が第二言語習得に関係がないというのも、また、実態とかけ離れた主張であると言わざるを得ない。一見同じ誤用や非用に見えても、そこに至る原因が母語によって異なる場合があることも指摘されている（張麟声 2014）。「誤用分析は古い」と切り捨てられるべきではなく、母語の影響が今一度日本語教育においても見直されるべきであろう。

もう一つの理由は、日本語母語話者向けの日本語文法や日本語教育に関するテキストの場合、学習者は日本語に対する内省が十分に利かず、結果的に論文を批判的に読むことが難しいという実態がある。庵（2017、2018）の場合は、学習者の母語と日本語との対照を重要な要素として取り入れているため、自らの母語に対する内省を利かせながら、より積極的、かつ批判的にテキストを読むという姿勢が自然に持てるようになるのではないかと考えた。

テキストにある説明や議論は必ずしも受講生にとって平易であるとは言えないが、テキストで扱われている文法項目は、日本語の学習者として、あるいは、日本語教師や日本語母語話者向けの語学教師、翻訳・通訳など日本語を活かした職業に就くうえでも有益であると判断した。

4. 授業の進め方

授業の形態

【毎週の課題】授業前日までに、全員が課題文を読み、課題文の内容に関する予習課題を Google Forms を利用して提出。（母語と日本語の対照を含む）

【授業の前半】は、受講生二人による発表。パワーポイントを準備する。教室では一人ずつ発表。

（各章のテーマについて各自単独で発表を準備）

【授業の後半】は、講師による各テーマに関する補足説明と予習課題のフィードバックを行う。

【学期末課題】授業で扱った項目、または、日本語学習者として関心を持った文法項目について小論（2000 字程度）を書き提出する。

表1 授業で扱ったテーマ

1	ガイドンス（進め方と評価について） 「正用・誤用・非用：学習者言語についての見方」庵（2017）用語編6章
2	「それを教えてほしかった：文脈指示のソとア」庵（2017）第9章
3	「産出の難しさ：結果残存のテイル形」庵（2017）第10章
4	「気づかれていない難しさ：タ形とテイル形」庵（2018）第6章
5	「人の思いはさまざまで：と思う」庵（2017）第6章
6	「論文で大切なこと：“と考えられる”と“考えられている”」庵（2017）第7章
7	「コップの水は多い？少ない？取り立て助詞」庵（2018）第1章
8	「実はとても簡単：使役受身」庵（2018）第2章
9	「たすきがけは不要：直接受身」庵（2018）第3章
10	「例文に注意しよう：使役」庵（2018）第4章
11	「ドアは勝手に閉まるの？：動詞の自他」庵（2018）第5章
12	「“受難”の“んです”を救い出そう：ノダ①」庵（2018）第7章
13	「文末に接続詞がある？～わけだ、からだ～：ノダ②」庵（2018）第8章
14	「本当に難しいの？ は と が」庵（2018）第9章
15	「漢語動詞の自他」（講師による講義形式）

表内のテーマは庵（2017）庵（2018）の2冊のテキストの第一部の文法項目のタイトルからとった。第1週、第2週、第15週は講師による講義形式をとった。

5. 受講生の反応と今後の課題

本年度の受講生は、中国語母語話者が8名、ベトナム語母語話者が1名の計9名である。発表準備もきちんとされており、内容もテキストをよく消化したうえで独自の視点から切り込むことができたもの

が多かった。日本語のレベルも総じて高いが、後半は級友の発表を熱心に聞く学生とそうでない学生に分かれてしまったことが悔やまれる。

予習課題についてはGoogle Formsを使用し、提出に伴う煩雑さを解消した。提出された予習課題の内容を授業の後半で共有することによって、当日の発表担当者以外の授業参加度を高めることに努めた。また、文の適格性や容認性を問う問題では、何回か同学期開講の対照言語学概論受講者の日本語母語話者と非母語話者による回答を用いて、どちらの授業の受講生も母語話者と非母語話者の回答を比較対照するなどした。

当該文法項目の母語との対照によって、一定の関心を引き出すことができたのではないかと考える。日本語だけでなく、共通の外国語である英語や、受講生の母語である中国語やベトナム語と対照させることにより、言語間の違いに対する気づきを促すよう心掛けた。

反省点としては、学生の発表にほとんどの時間を割いてしまうことが多く、事前提出課題の結果を見ながら考察する時間がなくなる場合が多かったことである。これも、個々の学生が発表に対して意欲的であったためではあるが、タイムキーピングにもっと注意すべきだったという反省が残った。

期末レポートは、大半の受講生が母語と日本語の対照研究を行った。分量は、2000字程度としたが、特に上限は設けず、書きたいだけ書くという方針を取った。

ほぼ毎週内容が異なるので、各項目の内容に興味を持っても、深める時間が取りにくかったかもしれない。今後、受講生がこの授業で得た日本語や母語の文法に関する気づきを日本語の学習や研究に役立ててくれることを期待する。

【参考文献・テキスト】

- 庵功雄（2017）『一歩進んだ日本語文法の教え方1』くろしお出版
 庵功雄（2018）『一歩進んだ日本語文法の教え方2』くろしお出版
 張麟声（2014）『新版 中国語話者のための日本語教育研究入門』日中言語文化出版社
 Selinker, Larry. (1972) Interlanguage. *IRAL*, 10(3), 209-231.

2024 年度（春夏学期） 日本語 I a 実践報告

サンジャヤ ソンダ

1. 授業の概要と目的

本稿は、2024 年度春学期の日本語 1a の授業実践の報告である。日本語 1a では、日本語学、日本における社会文化、日本語教育に関する様々な論文を講読し、講読した論文の要約を発表し、研究計画書を作成することで、アカデミックスピーキング及びライティング能力を身につけることを到達目標とした。

2. 学習目標

- ①アカデミックリテラシーに関心を持たせる
- ②アカデミックリテラシーに関する理解力を高める
- ③アカデミックライティング能力を高める
- ④アカデミックスピーキング能力を高める

3. 教材選択について

この授業では、特定の教材を使用せず、学生が興味を持つ論文を探して読み、読んだものを要約して発表をしたり、卒業論文のテーマを決め、研究計画の作成や研究計画について発表したりした。

論文の要約では、グループを作り、日本語学、日本語教育、日本社会文化に関する論文のうち、どの論文を読むかを各グループで決め、その論文を要約、発表してもらった。研究計画書は卒業論文のためのものであるが、実際に研究計画書として提出するものではなく、本授業では、あくまでアカデミックライティングの練習として作成した。研究計画書は個々の学生が日本語学、日本語教育、日本社会文化の研究分野のうち、研究テーマを一つ選択し、研究計画書を作成した。書き上げた研究計画書は教室で発表してもらった。

4. 授業の進め方

各回の授業の進め方について以下に述べる。

【毎週の課題】他の学生が教室で発表した論文や研究計画に関して、コメントや感想を CLE に記入した後、ディスカッションする。（12 回程度）

【授業の前半】ループを決め、グループで日本語学、日本語教育、日本社会文化に関する論文を選び、選んだ論文を要約した上で発表する。

【授業の後半】各学生が日本語学、日本語教育、日本社会文化のうち、興味のある研究分野を選び、研究計画書を作成した後、教室で発表する。

【学期末課題】授業の後半で作成した研究計画書を、講師やクラスメイトからの意見を参考に書き直したものを学期末課題として提出する。

表 1 授業で扱ったテーマ

1	オリエンテーション（春・夏学期）
2	論文の要約の発表（講師が発表する）、発表グループの決定
3	論文の要約の発表：グループ 1 & グループ 2
4	論文の要約の発表：グループ 3 & グループ 4
5	論文の要約の発表：グループ 5 & グループ 6
6	論文の要約の発表：グループ 7 & グループ 8
7	研究計画の作成、研究計画のテーマ
8	研究計画の例の発表
9	研究計画の発表①
10	研究計画の発表②
11	研究計画の発表③
12	研究計画の発表④
13	研究計画の発表⑤
14	研究計画の発表⑥

5. 受講生の反応と今後の課題

本年度の受講生は、中国母語話者が 9 名、韓国母語話者が 2 名、タイ語母語話者が 2 名の合計 13 名であった。グループ発表では、準備もきちんとされており、日本語学・日本語教育・日本社会文化に関する論文のうち、選択した論文のテーマも

全部興味深いものであった。発表後は、発表を聞いていた学生の中には、挙手して質問をしたり、意見を述べたりする学生もいれば、CLE に意見や感想を記入してから、ディスカッションの時間に発表のフィードバックをする学生もいた。受講生は、他の学生による論文発表の際、授業を積極的に受けている様子が見られた。

春学期の後半の授業においては、個々の受講生が興味を持っている研究分野でテーマを決め、研究計画書を作成した後、発表するという形で授業を実施した。受講生は皆、様々なテーマに関する研究計画書を作成し、わかりやすく発表することができた。受講生が作成した研究計画書について発表し終わった後、前半のグループでの発表の時と同じように、他の学生が質問したり、意見を述べたりする様子が見られた。また、多くの学生は、CLE に発表に関する意見や感想を書いた後、口頭でも伝えていた。

学期を通して、学生の授業への参加態度から、受講生が常に積極的に授業を受けていると感じられた。

期末課題は、受講生が作成し、発表した研究計画書を講師や他の受講生からの意見や感想を参考にして訂正したものを提出するものである。訂正後の研究計画書は発表時よりわかりやすくなっており、卒業論文の研究計画書としては良いものができあがった。

以上、授業のプロセスや受講生の反応を述べた。受講生みんなが積極的に授業を受けていると述べたが、CLE に意見や感想を書いた後、口頭で述べる受講生の方が多かった。今後の課題としては、講師がどのようにディスカッションを盛り上げればよいかも考えて、授業計画を立てなければならないと考える。そうすれば、発表後のディスカッションの時に、質問したり、意見を述べたりする受講生がより増えるのではないかと考える。

今後、受講生が論文購読や卒論のための研究計画の作成の能力の向上に役立つことを期待する。

【参考文献】

関崎博紀（2016）「接触場面初対面会話における話題スキーマー日本の大学における留学生と日本人学生の会話からの示唆」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』31, pp.17-32

2024 年度（春夏学期） 日本語Ⅱ a 実践報告

金谷 由美子

1. 授業の概要と目的

本稿は、2024 年度春学期の日本語Ⅱa の授業実践の報告である。日本語Ⅱa では、講義題目を「日本語の副詞」とした。日本語の副詞の中には、外国語への翻訳が難しいもの、学習者にとって習得が困難なものがあることが知られており、また、研究も十分に尽くされているとは言い難い。そこで、副詞研究でも知られる渡辺実氏の著作である（2001）『さすが！日本語』をテキストとして選択し、各章で扱われている日本語の副詞について、受講生全員がテキストを読み、各自選択したトピックについて、順番に発表するという形式の授業を行うことにした。

今年度はさらに、渡辺（2001）のトピックから選んだ副詞について発表だけでなく、別の学生が、自分が関心のある副詞を選び発表する構成にした。学期中ひとり計 2 回の発表を行うことになる。残り時間では、講師による解説を行う。

これによって、①受講者が日本語の副詞や日本語文法に対する知識を深め、自らの目標言語である日本語に対する探求心を持つこと、②受講者が日本語の副詞が現れる文と母語を比較対照することを通して、自らの日本語学習者としての経験を生かしつつ、能動かつ批判的に論文を読むこと、③研究課題を自ら見つける力をつけることを目的とした。

2. 学習目標

- ①日本語について言語学的な視点から書かれた文章や論文が読めるようになる。
- ②日本語の副詞について、何が問題になっているのかについて知り、また、それについて議論ができるようになる。
- ③自らの日本語学習を振り返り、今後の研究や日本語学習に役立てることができる。
- ④自分の考察や意見をまとめて口頭で発表できるようになる。
- ⑤自分の考察をまとめて小論を書くことができる。
- ⑥自分で研究テーマを探すことができる。

3. 教材選択について

副詞を扱うにあたり、テキストとして渡辺実（2001）『さすが！日本語』を選んだ理由は、①単語別に章分けされており、用例も豊富で、授業で日本語の副詞をひとつひとつ扱うのにうってつけであること、②一般向けに書かれた新書であり、専門用語があまり使われていないため、言語学を専門としない学生にも読みやすいこと、③著者の渡辺実氏が日本語の副詞研究において重要な研究を残しており、20 年以上たった今でも、読むに値する分析がされていることである。その上で、④記述しつくされていない部分に気づく余地もあり、学生が自分でテーマを探す助けになると考えた。

テキストにある説明や議論は必ずしも受講生にとって平易であるとは言えないが、日本語の学習者として、あるいは、将来、翻訳・通訳、語学教師など日本語を活かした職業に就くうえでも有益であると判断した。

4. 授業の進め方

授業の形態

【毎週の課題】10 回程度予習課題を Google Forms で提出（用例の母語への翻訳、適格性を問う問題等）

【授業の前半】は、受講生 2 人、または 3 人による発表。（各章のテーマ、あるいは、自分で選んだ副詞について口頭発表の準備）

【授業の後半】は、講師による補足説明、事前に提出した翻訳課題を見て考察を行う。

【学期末課題】授業で扱った項目、または、日本語学習者として関心を持った文法項目について小論（2000 字程度）を書き提出する。

表 1 授業で扱ったテーマ

1	ガイドンス（渡辺 2001 の副用語とは） 講師による講義形式 せめて「せめて 1 年は」
2	やはり、やっぱり 「やっぱりコーヒーにします」
3	どうせ「どうせ行くな」 まったく

4	せっかく「せっかくパリまで」 どうも
5	いっそ「いっそあのとき」 あたかも
6	とても、とっても「とても 80 とは」 敢えて
7	もっと、「もっと光を」 ずっと
8	よほど、よっぽど「よほどお酒が」 いざ
9	多少、「多少生意気な」 結構
10	もう「もうこの世に」 めっちゃ
11	まだ「まだ 100 票ぐらい」 ※慣用句について講義
12	いま、「いま若い女性の方が」 普通に
13	さっき「さっきの自慢は」 なお、いかに
14	つい、ついに、ついぞ「ついうっかり」 ちょっと、到底
15	ずいぶん「随分正直な」 いちおう

表内のテーマは渡辺（2001）の各章の用例等からとった。

5. 受講生の反応と今後の課題

今年度の受講生はタイ語母語話者 1 名、韓国語母語話者 1 名、中国語母語話者 12 名の総勢 14 名である。

発表も提出課題もまじめに取り組めていたと思う。日本語のレベルも総じて高く、完璧な日本語に近い学生もいる。

Google Forms による予習課題では、主として渡辺（2001）の用例を母語に翻訳するほか、適格性判断を問う選択問題等を課した。提出された予習課題の内容を授業の後半で講師が発表する形で共有することによって、発表担当者以外の授業参加度を高めることに努めた。

日本語だけで議論を進めるのではなく、共通の外国語である英語や、受講生の母語である中国語や韓

国語、タイ語と対照させることにより、言語間の副詞の扱いや類似単語の意味の違いに対する気づきを促すよう心掛けた。

当該単語の母語との対照によって、一定の関心を引き出すことができたのではないかと考える。実際に日本語の副詞が他言語では何通りかの訳語（または訳出ができない）に相当することを観察することにより、日本語の副詞に対しても、自らの母語に対しても知識を深めることができたのではないと思われる。用例を単純に翻訳比較するだけでも多くの気づき、知見が得られることがわかってもらえれば、この授業の目標は概ね達成できたと考える。

期末レポートは、大半の受講生が母語と日本語の対照研究を行った。指示通り、具体的な用例を挙げて論じることができた。分量は 2000 字程度以上とし、書きたい人は書きたいだけ書くという方式にした。

今年度は 14 人だったので、人数の多かった去年とは異なり、発表も例年の 2 回に戻した。反省点としては、中国語母語話者が多いために、どうしても中国語との対照が中心になってしまう点である。他にも、毎週扱う副詞が異なるので、各項目の内容に興味を持っても、じっくり考えて深める時間が取りにくかったかもしれない。毎回異なる副詞を扱うため、深めることが難しい一方で、二人ずつの発表で、どちらも同じ内容では、学生にとっては少々退屈という面もあるかもしれない。今後は、一人には渡辺（2001）の副詞、もう一人には、別の副詞についての発表を課すのもいいかもしれない。翻訳が難しい日本語の副詞の数は多いので、存在に気づくことに意義があるだろう。

今後、受講生がこの授業で得た日本語や母語の副詞、語彙や文法に関する気づきを日本語の学習や研究に役立ててくれることを期待する。

【参考文献・テキスト】

渡辺実（2001）『さすが！日本語』ちくま新書

※現時点で絶版のため必要箇所を配布

【海外交流】

毎年、春と秋には、海外に留学したり、日本語の教師として活躍してきた仲間が、大学に戻ってきて賑やかになります。また最近は、日本語教師として海外に行くだけでなく、海外の学会で研究発表をする人たちも増えてきました。

第6回 アンコールワット国際日本語教育セミナー参加報告書

下本 有美香

1. はじめに

本稿は、2024年9月7日～8日にかけてアンコール大学（カンボジア王国シェムリアップ州）にて行われた第6回アンコールワット国際日本語教育セミナーの参加報告である。今回は、開催国カンボジアをはじめ7か国（カンボジア、スリランカ、タイ、日本、ネパール、ベトナム、マレーシア）から日本語教育関係者が参加し、学び多い2日間を共にした。

2. アンコールワット国際日本語教育セミナー

本セミナーは、アンコール・ワットの町、シェムリアップを中心に活動を行うアンコールワット日本語教師会主催の国際セミナーである。アンコールワット教師会は、2007年に設立されて以来、国際セミナー（隔年で開催）の他にも年に2～3回の日本語教育セミナーや日本語コンクールを開催し、地元シェムリアップの日本語教育に大きく貢献している。

第6回の今回は、近藤彩先生（昭和女子大学）の基調講演や池田玲子先生（同）による教師研修を通して、異文化間コミュニケーションについて多くを学んだ。ケーススタディについての研修では、グループでの話し合いやロールプレイを通じて異文化接触の際に生じる問題について理解を深めたり、日本で理論ばかり学んでいては到底体験することの出来ないであろう価値観を知ることができ、大変楽しかった。

表1 全体スケジュール 1日目

2024年9月7日	
9:00-9:15	開会式
9:15-10:05	基調講演
10:05-10:15	休憩
10:15-11:15	機関報告 第Ⅰ部
11:15-11:25	休憩
11:25-12:25	機関報告 第Ⅱ部
12:25-13:40	昼休憩
13:40-14:40	実践報告 第Ⅰ部

14:40-14:50	休憩
14:50-17:30	教師研修
18:00-20:00	懇親会

表2 全体スケジュール 2日目

2024年9月8日	
8:30-8:40	開会式
8:40-9:40	実践報告 第Ⅱ部
9:40-9:50	休憩
9:50-10:50	実践報告 第Ⅲ部
10:50-11:00	休憩
11:00-12:00	実践報告 第Ⅳ部
12:00-13:30	昼休憩
13:30-14:30	研究発表 第Ⅰ部
14:30-14:40	休憩
14:40-15:40	研究発表 第Ⅱ部
15:40-16:10	教師研修
16:10-16:20	休憩
16:20-16:40	閉会式

3. 研究発表

本セミナーでは、機関報告、実践報告、研究発表の3つのセクションで発表者を公募していた。機関報告では、主にカンボジア国内の日本語教育機関がそれぞれの機関について紹介を行った。実践報告では、各国で日本語教育に携わる先生方がそれぞれの実践について発表されており、小断を取り入れた実践などユニークな取り組みを知ることができた。研究発表では、先生方の発表を拝聴し、様々な分野の研究を身近に感じることができた。各々発表は15分、質疑応答5分の計20分で、全部で25の発表があった。限られた持ち時間であったが、それぞれについて活発な議論が行われ、新しい視点を得ることができた。

筆者は、国際日本文化学園（シェムリアップ州）所属の日本語教師、クーン・ソチア氏と共同研究を行い、発表に参加した。発表タイトルは「クメール語を母語とする日本語学習者の誤用について」で、日柬の今後の友好関係を願って、クメール語母語話

者であり、かねてより筆者の親しい友人であるクーン氏と共に1つの研究を完成させた。簡単なアンケート調査を元にした発表であったが、発表後は様々な先生方から「学習者、教師双方にとって有益な研究」「学習者が誤用を起こす理由がわかった」などありがたいお言葉をいただき、感激した。共に研究、発表に励んだクーン氏にはこの上ない感謝の気持ちでいっぱいであるし、研究成果を発表することの達成感、そしてそれが認められ、評価されるという貴重な経験を通して自信に繋がれた気がしている。筆者はクメール語はまだ入門レベルであるが、将来はこの研究をもっと進めていきたいと一つ目標が出来た。日本語教育の分野においてカンボジアに関する研究はまだ少なく、そんな中クーン氏と共にテーマを決め、議論を楽しめたのは大変ありがたい機会であった。



写真1：発表風景

4. 先生方との交流

海外の学会に参加すると自分の世界が広がる。筆者は昨年からマレーシア、タイでの国際セミナーにも参加しており、海外に出ていけることのありがたみを痛感している。

今回のセミナーでも、ただの大学院生の身でありながら、国内外の日本語教育現場で活躍されている先生方とお話する機会を得た。大先輩である先生方と直接お話するのはそれ自体が得難い経験であるが、先生方の実践やビリーフを伺うと大変刺激になり、

いつもわくわくする。各国の日本語教育事情や教育機関のお話も将来について悩んでいる自分にとって、様々な視野を提供してくれる。また筆者がまだ学生であるために、研究についてのお話をしてくださる先生もいらっしやり、大学院で取り組んでいる研究についてヒントが得られたり、改めて将来について考えを巡らすことができたりと、学会で得た財産は計り知れない。

近年オンライン化が進み、部屋にいながら世界とつながることもできるようになった。国際セミナーも例外ではなく、オンライン参加も可能な研修や学会も多く出てきた。しかしそれでは得られないものがあるということを、今回の先生方との交流で改めて確認した。



写真2：国際セミナーポスター

5. さいごに

今回の国際セミナーでは、初めて発表者として出席したが、同時に以前よりお世話になっている国際日本文化学園の鬼一二三先生、先述のクーン氏のご厚意により運営側の仕事にも少し携わる機会をいただいた。会場では大忙しだったが、大変充実してお

り、学会というものをより一層理解する貴重な機会となった。アンコールワット日本語教師会理事長の鬼一三先生、クーン・ソチア氏には感謝してもしつくせない。いただいた経験を忘れずに、今後も日本語教育に携わる人間としてキャリアを積んでいく所存である。

これからも日本とカンボジアの友好関係、また同国での日本語教育が発展していくことを祈って本報告書を結びたい。

お世話になった皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



2023年度(令和五年度)卒業論文題目リスト

2024年3月に外国語学部日本語専攻を卒業した学生49名の卒業論文題目です。

外国語学部日本語専攻では、日本語学、言語学、日本文化学、日本語教育学の分野で卒業論文を書くことができます。

卒業論文題目

- ・"日本語らしさ"の研究
- ・日本語母語話者と学習者のテキストチャット上の会話の構造
- ・江戸時代の桜の捉え方について —林葉累塵集より—
- ・日本における四川料理の継承・変更について研究 —大阪の現地調査に基づいて—
- ・太平記作品の図像から見る擬人化の意味
- ・超若年層～若年層における富山方言の文末表現について
- ・いじめと語用論
- ・張り紙や看板から見る「～(さ)せていただく」の使用状況
- ・言語景観からみる日本語のポライトネス —阪急電鉄のマナーポスターを対象として—
- ・日本語教育現場におけるDXの可能性と課題 —日本語教師の反応から—
- ・2.5次元文化の拡張
- ・大都市圏A市における日本人住民の外国人との関わりと外国人意識 —コミュニティカフェでの調査から—
- ・野田秀樹「フェイクスピア」における言葉遊び
- ・働きながら日本語学習を続けたインドネシア人技能実習生Aさんの日本語学習プロセスと動機づけ
- ・日本で生活するシリア人の一事例から考える多文化共生 —留学生・保護者としての視点に着目した語りの分析—
- ・有声阻害音の数と音象徴の関係について
- ・日本語母語話者2者間の対面会話における会話開始部の分析 —会話の本題に着目して—
- ・和風ホラーゲームにおける巫女の人物像 —コーエーテクモゲームズ『零～濡鴉ノ巫女～』を例にして—
- ・非日本語母語話者がコロナ社会を通じて実感した生活上の変化 —学齢期の子供をもつ保護者に着目して—
- ・アニメにおける狐キャラクターについて
- ・現代語のコロケーションからみる複合動詞「一すぎる」の意味解釈
- ・タカラジェンヌの名前における音象徴的特徴に関する研究
- ・多文化共生社会における異文化接触とアイデンティティ:留学生の事例研究について
- ・十日戎における福娘と福鈴の意義
- ・宮崎県日向方言における感情表現とイントネーション
- ・二次創作小説における「オリ主」の位置づけについて —「ウマ娘プリティーダービー」の事例から—
- ・「日本語母語話者同士の日常談話において発話が重なる頻度はどのように変化するのか」—同一ペアを縦断的に観察することによる事例調査—
- ・滋賀県観光政策におけるアニメの聖地巡礼コンテンツの役割について
- ・日中両国における妖怪文化の比較研究 —中国の『山海経』と日本の『画图百鬼夜行』を中心に
- ・ジェンダークィアのL2日本語話者にとっての日本語学習経験 —クィア自身による経験の語りから—
- ・近代語におけるガに交替可能なノについて
- ・見た目のイメージと名前のイメージが相反する場合どちらのイメージが勝つか
- ・日本語における左方転位構文と無助詞構文についての考察
- ・関連性理論から見るキャッチコピー
- ・簪と櫛にまつわる俗信の比較分析
- ・声の高低がもたらす職業らしさ
- ・「粋」が持つ意味を捉え直す —「粋な計らい」の用法を中心に—
- ・長音と可愛さの音象徴的なつながりに関して
- ・若い世代の在日コリアンのアイデンティティの形成要因について —新世代在日コリアンの事例研究—
- ・インターネット上における現代語「無限に」の用法について
- ・競走馬の名付けに見られる音象徴 —牡馬・牝馬・重賞優勝牝馬について—
- ・日本の漫画におけるオノマトペの効果～恋愛漫画を題材として～
- ・中国語学習者の第二言語不安と誤用訂正に対する意識
- ・依頼場面における「～てもらってもいいですか」の使用について
- ・日本ドラマにおける東アジア系人物の表象 —ベトナム人と中国人を中心に—
- ・「たぶん」「おそらく」「きっと」「たしか」の使用傾向
- ・接待を伴う飲食店での女性キャストの源氏名の傾向
- ・指示参照ファイル理論に基づく嘘とミスリードの判別基準 —「位置づけ」の観点から—
- ・異類婚姻譚から見る民話における蛇の像について

2024年度人物往来

～今年度の先輩たちの異動をお知らせします～

就職しました！

中井靖子（M）→大阪公立大学

笹川史江（M）→大阪大学日本語日本文化教育センター

→国際交流基金関西国際センター（2025年4月着任）

日本語を教えに行ってます！行ってきました！

岸日菜穂（U）→インド工科大学マンディ校（インド）

市来海唯（D在）→ランシット大学（タイ）

田中伶弥（D在）→ランシット大学（タイ）

教育実習に行ってます！行ってきました！

大橋未希（U在）→デュッセルドルフ大学（ドイツ）

木村みのり（U在）→チェンマイ大学（タイ）

河村綾音（U在）→チェンマイ大学（タイ）

西村未亜（U在）→チェンマイ大学（タイ）

永井天乃（U在）→ハノイ国家大学外国語大学附属外国語英才高等学校（ベトナム）

楊子涵（D在）→ハノイ国家大学外国語大学附属外国語英才高等学校（ベトナム）

『日本語講座年報』投稿規定

- ①掲載内容 1)学術論文・資料・書評論文など。
2)日本語教育実践報告書/事情報告書・講演/講義記録など。
- ②投稿資格
学術論文・資料・書評論文については
1)大阪大学外国語学部日本語専攻生
2)大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻生
3)大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻応用日本学コース院生
4)大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻応用日本学講座教員
5)大阪大学外国語学部日本語専攻非常勤講師
6)1)～5)の投稿有資格者がファースト・オーサーである場合は、学外執筆も可。
日本語教育実践報告書/事情報告書・講演/講義記録等については
1)～5)および、6)各卒業生・修了生等
- ③審査 教員以外の論文については審査を行う。
審査結果は、＜採用＞・＜条件付き採用(書き直し)＞・＜不採用＞の3段階で示す。
掲載が決定したものについては、後日オリジナルを提出してもらう。
- ④原稿締切 別途定める。
- ⑤原稿枚数 原稿の種類により、別途定める。
- ⑥発行部数 (未定)
- ⑦抜き刷り 作成しない。
- ⑧原稿書式 (1)A4版完全原稿のWordファイルを提出すること。
(2)使用言語は問わないが、Wordで原稿作成可能なものに限る。
(3)註は本文末にまとめることとし、脚注方式にしないこと。
(4)字数・行数は以下を目安とする。
【和文原稿】体裁は二段組みで、1行22文字、1ページ44行。
フォントはMS明朝で、本文は10ポイント。本文中の節タイトルはボールド。
原稿の題名は12ポイントボールド、名前は11ポイントボールドで、一段組(下図参照)。
【外国語原稿】体裁は二段組みで、1行33ストロークで、1ページ44行。
書式等は、編集段階で統一することがある。上下30ミリ、左右25ミリの余白をとること。
表やグラフは、二段組みでも一段組みでも良い。
(5)原稿は可能な限り横書きにすること。横書きが不可能な場合にも、A4用紙を縦長に使用することとする。縦書きに関するその他の書式は執筆者に一任する。(二段に分けるなど。)
(6)頁数は編集段階で入れるので、原稿に入れないこと。
(7)原稿の第一頁は次のようにするのが望ましい。

題目を中央に

中国〇〇大学における日本語教育

一行あけて執筆者名

外 大 花 子

一行あけて本文

本文.....

- (8)肩書(「日本語・日本文化講座准教授」・「大学院M2」など)は不要。
(9)原稿は原則として返却しない。

日本語講座年報 2023-2024

2025年3月31日発行

エディトリアル・表紙 Design Office 光 芸 社

編 集 ・ 発 行 大阪大学外国語学部外国語学科日本語専攻

〒562-8678 大阪府箕面市船場東3丁目5-10

印 刷 ・ 製 本 株式会社オーエム

〒537-0025 大阪市東成区中道4-5-14-101

電話 06(6974)1917

